

42471

教科書文庫

4
810
42-1941
20000 42076

200030
2778

Kodak Gray Scale

- A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

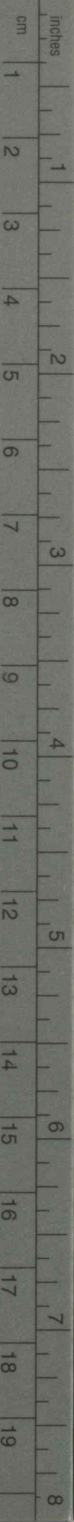


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

- Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
Na19
資料室



新撰女子國語讀本
四年制用
卷一



375.9
5219

日九月二十年六十和昭

濟定檢省部文

用科語國校學業實・用科語國校學女等高

文學博士 佐佐木信綱 編
文學博士 武田祐吉

新制
新撰女子國語讀本

四年制用



筆助之森本山

峰蓉美



新撰女子國語讀本 卷一

目次

一	櫻	二	摘	三	船の起原	四	私の農業	五	母と蘆	六	飼ひもの
---	---	---	---	---	------	---	------	---	-----	---	------

今井邦子	西村眞次	五十嵐力	西條八十	野上彌生子
------	------	------	------	-------

一	五	一〇	二〇	二五	三〇
---	---	----	----	----	----

目次

一

七	な	ぎ	さ
八	ク	リ	ミヤの天使
九	水	郷	夏趣
一〇	静	か	な日
一一	七	月	の星座
一二	眞	夏	の海
一三	燕	嶽	の壯觀
一四	旅	人	となりて
一五	國	境	に立ちて
一六	林	より	街より
一七	黙	つて	働く修養

山村	暮鳥	三九
野邊	地天馬	四二
杉村	楚人冠	五〇
佐佐木	雪子	五五
吉村	冬彦	五九
阿部	次郎	六八
吉田	絃二郎	七〇
北原	白秋	七八
九條	武子	九九
小林	一郎	一〇五

一八	土	に	なる
一九	こ	の	一躍
二〇	壺	と	提灯
二一	緋	緘	の鎧
二二	四	季	小品
二三	日		本

三浦	修吾	一一一
人見	絹枝	一一八
柴田	鳩翁	一二九
徳富	蘆花	一三七
		一三九
		一四五

〔自修文〕

一	子	犬
二	新	緑の奈良
三	最	後の授業

二葉	亭四迷	一五〇
荻原	井泉水	一六一
		一六八

附録

主要象形文字表
國語假名遣表



新撰女子國語讀本 卷一

一 櫻

街にも、園にも、野にも、山にも、花の咲き満ちる時が來ました。
賀茂眞淵の歌に、

うらくとどけき春の心よりにほひいでたる山
ざくら花

長閑かな春の心から生れ出て、春の魂ともいふべきは櫻花であります。かういふ櫻花を以てつゝまれた我が日本

賀茂眞淵
通稱は岡部衛
士。國學四大人
の一人。明和六
年歿。年七十三。
(二三五七―二
四二九)

かういふ
かくいふ

禮讚
ライサン。

なこそ
勿來。茨城縣多
賀郡に關址あ
り。

源義家
頼義の長子。鎮
守府將軍。天仁
元年歿。年六十
八。(一七〇一—
一七六八)

軍旅

の春を樂しむ我等はその幸をたへ、櫻花を禮讚せずには
居られません。

吹く風をなこそその關と思へども道もせにちる山櫻
かな



八幡太郎義家圖 小堀範音筆

に和歌を詠ずるといふやうな、優しい心持もあつたのです。
しかして、奥州に多くの關はあつたが、勿來の關だけが此の

餘徳

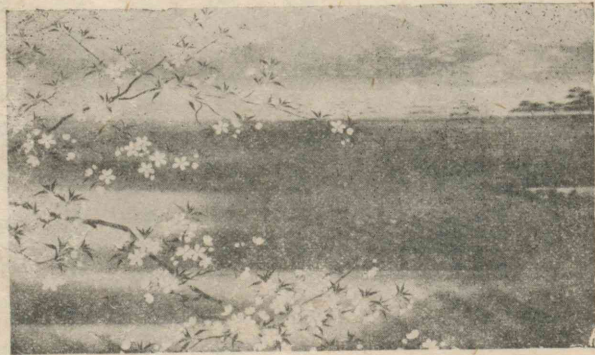
一首によつて名所となり、數百年の後の旅人がその址を訪
ふのも、歌の餘徳といへませう。

花も散り人も都へかへりな
ば山さびしくやならむとす
らむ

西行法師
俗名は佐藤義
清、歌僧。建久元
年歿。年七十三。
(一一七三—一
二二〇)

これは、西行法師の歌であります。
うき世をよそにして山にこもり、自
然を心の友とした清い胸の底に、か
ういふゆたかな人間味があつたの
であります。

高殿の窓てふ窓をあけさせて四方の櫻のさかりを



磯田又一郎筆 櫻 花

ぞ見る

明治天皇の御製であります。いかにも雄大で、眞に帝王の大御歌であります。古より今にいたるまで、花を見るといふ題の歌は数しれずありますが、これほど大きい歌はありません。もし明治時代の意氣をあらはした一首の歌をあげよといふならば、私はこの「高殿の窓てふ窓を」といふ御製を挙げたいと思ひます。

朝日影とよさかのぼる日の本のやまとの國の春の

あけほの

(佐久良東雄)

二 摘 草

摘草といふ事はだん／＼すたれてゆくやうであるけれど、私が少女の日の頃の春の遊びは、殆ど摘草に極つてゐたと言つてもよい程のものであつた。

野山の雪がまだむら消えの頃から、私達はまう待ちくたびれたもののやうに、友達を誘ひ合せて、田の畔に山の畑道に目につく程の草を摘み集めては歩いたものであつた。

田の畔に竹籠を入れて掘りとり、露の臺の根元には、土にまじつて鋭い霜の光がちら／＼と冷く手の先を赤くさせるのである。さうした寒い霜土のなかから掘りとり、圓いつ

むら消え

畔

アゼ。田と田との間にある道。

竹籠

タケベラ。

露の臺

フキのタウ。露の花軸をいふ。

刺戟

薺
ナツナ。十字花科に属する一二年生草本。



嫁菜
菊科に属する多年生草本。



摘草 八幡白帆筆

つましやかな露の臺は、淺黄の色も黒ずみがちで、見たところ春のものとも思はれないけれど、雪の下に深く埋れて春を待つてゐたやうな匂ひを持つた小さな芽は、少女たちの心にどれ程の刺戟を與へてくれる事であらう。雪が全く消えてしまふ三月の中頃からは、摘草もやう／＼おもしろい盛りとなり、薺・嫁菜たんぽぽつくし……摘めば忽ち籠にあふれる豊かな野邊となりゆく

つて

晝餉

下諏訪町
長野縣諏訪郡。
信州
信濃の國。長野縣の全部を占む。

のである。薺の白い根の匂ひは土にみなぎる生命を思はせ、嫁菜の青いほのかな味は心にまでも優しく残る。たんぽぽの葉はほろ苦く、さて捨てがたい。此の味彼の匂ひ、とりどりにいづれも春の野の楽しさを傳へるつてならぬはない。

或年、私は山の上の青草原に足をのばして、友と一緒に晝餉の包をひらきつゝ、目の下に霞んで見える自分の住んでゐる下諏訪町をしみじみと眺めた。信州特有の大きな石をのせた屋根が列つて、町は靜かに其の屋根の上から紫の煙がいく筋もゆるく／＼春の天空に消入つてゆくのであつた。——と、山の上のお寺から耳に親しい響を持つた鐘の

音が物言ふやうに鳴りわたつて来た。それはまだ時計といふものが町になかつた遠い昔から、朝に晝に夕に、町の人の生活の上に、時を報ずる重い勤めを續けて来た、古い親しい鐘の音であつた。

私は其の時其の鐘の音を聞き、目の下に晝餉の煙をあげてゐる平和な町の屋根を眺めて、限りなく故郷を愛しなつかしむ心が、深くも身に沁み起つて来たのである。



信濃の山

聞きなれた鐘、見な

なつかしむ

炬燵
コタツ。

あわたゞしい

れ住みなれた町、そこに平和に成長した少女心を、「故郷」に向つてひざまづいて感謝したいやうな、さうした心の芽ぐむ年頃に、私はいつかなつてゐたのであつた。
其の平和な故郷の町を去つて、私はまうそこで暮らしたよりも永い年月を、東都の片はしに重ねてしまつた。年々に雪の降る冬の夜の炬燵に居て、子供たちと春の摘草を約束するのであるが、あわたゞしい都會の生活や主婦のいとなみは、つひに私を長閑かな春の野にやらない。それでいて私の心に摘草の楽しさは、少女の日の如く私を誘ひかけるのである。

(今井邦子—和琴抄)

今井邦子
歌人。長野縣の
人。明治二十三
年生。

三 船の起原

大昔、人間の知識がまだ今日のやうに進まなかつた時、一番困つたのは水であつた。河に橋をかけることを知らなかつたから、いつも泳いで渡ることにしてゐた。廣い灣があつて、其の端の岬と岬とに住んでゐる人は、海を越えることが出来なから、濱邊傳ひに遠廻りをして目指すところへ行かなければならなかつた。

そこで利巧な人が考へを廻らして、河へ橋をかけ、湖水や海には船を泛べてそれを渡ることにした。

支那では、昔、黄帝といふ神人が、蜘蛛が木の葉に乗つて水

黄帝
支那、上古の皇
帝。

上に漂つてゐるのを見て、船を造ることを考へ出したと傳へてゐる。しかし、發明はさう一足飛びに出来るものではない。船が出来上るまでには、種々の工夫が費され、何年も何年もかゝつて、何人も何人もが頭を悩まして造り上げたに相違ない。

臺灣の高砂族——といつても、種々の部落に分れてゐるが、ブヌン族のイバホ社の者は、先祖がラモガンといふところにもた頃、鼠が笹の葉を銜へて、濁水溪を渡つてゐるのを見て、竹筏を造ることを考へたと云ひ傳へてゐる。

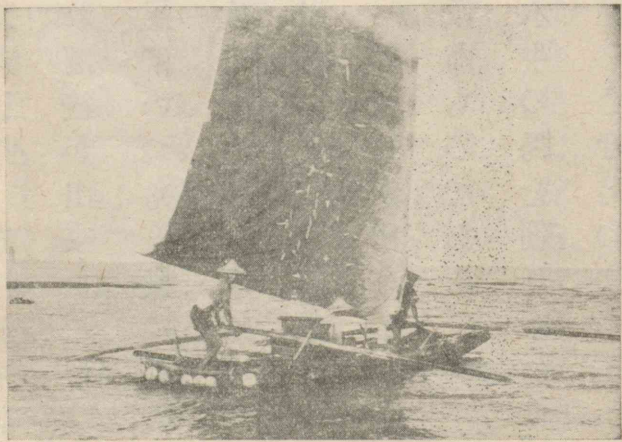
今一つの話は、昔、先祖にイシナシコワン・パラベ・イシパントシヤ・タケシタロマン・タクンヤンといふ五人の人があつ

ブヌン族
新高山の東部及び南部に占居せる種族。
イバホ社
臺中州新高郡の蕃地にあり。
濁水溪
源を臺灣山脈中の合歡山・新高山に發し、臺南州の東北隅に於て濁水・北港の二溪に分れ、西流して海に注ぐ。

日月潭
臺灣中部にある
湖

て、山の中に入つて狩をしてゐたが、一頭の白鹿が現れたので、それを追つたら、白鹿は日月潭といふ大きな湖水の方へ逃げ、逃げ場を失つて到頭水の中に入つた。五人は水が深くて渡る事が出来ないで、どうしようかと相談をしてゐると、一匹の鼠が楠の木片に乗つて尻尾を動かして舵を取つてゐるのが見えた。これはよい思ひ附きだと、早速木を刳つて船を造り、檣を削つて舵を造り、それで無事に湖水を渡つて、白鹿を捕へることが出来たといふことである。しかし、これも想像から生れた作り話で、實際刳船がそんなに早く出来よう筈がない。それならばどうして船が造られるやうになつたか。昔

の人間といつても、木の葉や瓢箪が水に浮いてゐるのを見れば、軽いものが水に浮くといふことに氣附いたであらう。時には、丸太が川を流れ下り、竹が水に泛んでゐるのを見て、それに縫つて居れば水上に泛ぶことが出来ると悟つたのであらう。また死んだ動物が水の上にぽかりと浮いてゐるのを見ては、さうした動物の上に乗れば水に沈まないといふことを發見したであらう。



臺 灣 の 竹 筏

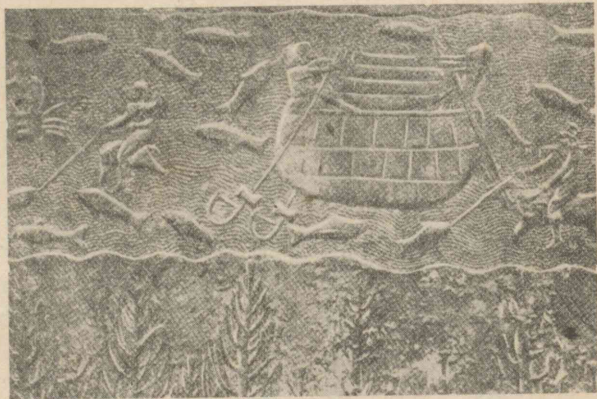
メソポタミヤ
西南アジアのチ
グリス・エウフ
ラテス兩河に挟
まれる地方。今
イラク王國の一
部となる。

かうした種々の經驗から、一番初めには丸太に跨つて、足で水を掻いて對岸へ渡ることを工夫した。それを何本も何本も寄せ、藤蔓の様なもの縛れば、筏が出来上るわけである。筏が三本、五本、七本といふ風に、いつも奇數に丸太を並べるのは、中心である一本の丸太の左右へ一本づつつけ足したからで、左右均齊でなければ決して眞直に進まないからである。木の代りに竹を使へば竹筏が出来る。臺灣のテクパイといふ竹筏は實に立派なものである。

メソポタミヤや印度へ行くと、水牛の腸を刳りぬいて、一本の足に縦に孔をあけて腹まで通じさせ、足の先の孔からぶうくと息を吹き入れると、空氣が腹の中へ一ぱい溜る。

センナケリブ
アッシリヤの王。
(在位西曆前七
〇五―六八一)

サンチ
印度の中部にあ
る村。村の東南
砂丘に十數箇の
塔あり。



板彫石の殿宮のプリケナンセ

そこで足の孔を塞いで、それを河の上に泛べ、自身は水牛の腹の上へ四つん這ひになつて乗り、手で水を掻き、足で舵を取つて前方へ進んでゐる。これは古くからメソポタミヤにあつたもので、センナケリブといふ王様の宮殿の壁には、水牛の浮囊に乗つてチグリス河を渡つてゐる圖の彫刻がある。印度のサンチの彫刻にもやはり同じ圖があつて、水牛革船が大昔からあつたことは疑ひがない。竹筏をもつと精巧にすると、竹籠の船が出来る。印度支

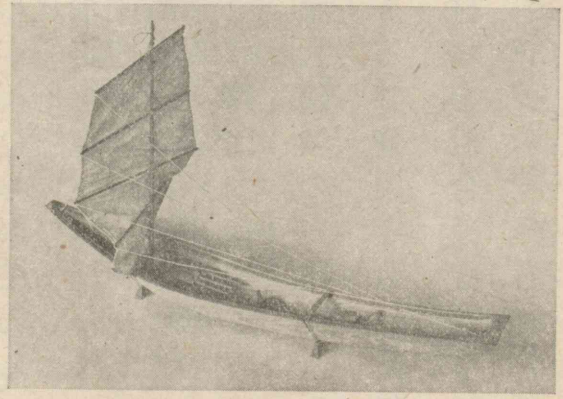
那へ行くと、今日でも竹籠の船が河に浮いてゐる。竹籠では水が漏るから、内面には牛の糞と椰子の油とを混ぜてそれを塗ると、漆塗のやうになつて水が漏らない。

内面へ塗る代りに、外面へフランネルだの、水牛の革だの、魚の皮だのを張つても水が漏らぬ。チギリス河や、インダス河に泛んでゐるクファアといふ運搬具は、この籠の外へ皮を張つたものである。エスキモー人の乗つてゐるカヤクといふ船も、やはりクファアと同じものだ。ギリヤークといつて樺太に住んでゐる土人の船には、鮭の皮を張つたものもある。

エスキモー人
北極地方に分布
せる原始的種
族。
ギリヤーク
樺太北部に住む
種族。

一本の丸太はくるくると廻つて水の中へ這り落ちるの

で、それを何本も寄せると筏が出来るが、筏では水が浸みこんで来るので、太い丸太を刳りぬいて中を洞にすることを工夫した。それが即ち刳船で、大きなものは楠の木で造る。杉の木などで造ると、細長いものになる。何しろ一本の木では、長さも高さも限りがあるから、人や荷物を澤山載せることが出来ない。そこで、刳船の両側へ板を當てることを工夫して、それを藤蔓のやうなもので縫ひつけ出した。これを縫合はせ船といふ。沖繩縣の糸満とい



(型模) 船せは合縫の満糸

糸満
沖繩縣島尻郡糸満町。沖繩島の南部に位す。

ふ所へゆくと、今日でも猶縫合はせ船——即ち剝船へ舷側

を補つたものが用ひられてゐる。

其の次に木釘を用ひて縫合はせ

ることを止め、鐵が發見せられてか

ら、木釘の代りに鐵釘を使ふことに

なつた。先年大阪城の東に當る今

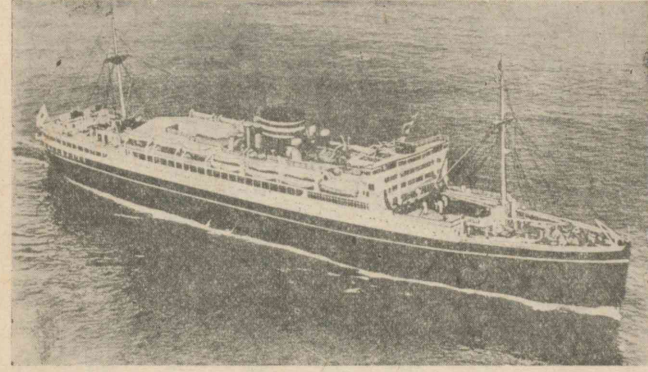
福といふところで發掘せられた剝

船は、二つの材木を組合はせ、接ぎ目

には木釘と鐵釘とが互に打つてあ

つた。

こんな風にして、船は段々精巧なものになり、遂に今日の



今福
大阪市旭區今福
町。

やうに鋼鐵の船だの、コンクリートの船だのが出来るやう
になつたのである。船の發達した順序を見ると、人間の知
識の、一代毎に進んで来る順序も窺はれて、大變に面白く感
ぜられる。

私は、昭和四年五月、横濱船渠會社で、一萬六千噸の秩父丸
の進水式が舉行されたのを見た。するくくと船臺を這つ
て、大きな船が海水へ突進してゆく有様は、此の世に於ける
最も勇しい光景の一つである。これから先、人間の知識が
進んだら、秩父丸を剝船のやうに思ふ時代が来るかも知れ
ない。否、知れないではなく、確かに来るに相違ない。

(西村眞次—史的素描)

西村眞次
文學博士。史學
者。早稻田大學
教授。三重縣の
人。明治十二年
生。

四 私 の 農 業

初夏と梅雨とを思ふと、直に私の心を躍らせるものがあります。

苺です！ 私は苺なしに、春から夏に越えることが出来ません。

水菓子の類の中で、私に取つて苺ほどうまいものはありません。で、其の培養には一番に骨を折ります。他の草木に一度か二度やる寒肥を、苺には三度からやるのもその爲です。

五月から六月にわたる苺の盛りの二十日間は、私に取つ

寒肥
カンゴエ。

て實に舌の御正月です。同時に腹の御正月でもあり、目の御正月でもあり、頭の御正月でもありません。朝早く起きて雨戸を一枚繰る。寝衣のまま、直に飛出して、跣足で朝露を踏んで苺畑に行く時の心持。莖の長い濃緑の厚い葉が、銀のやうな朝露に光つて、其の間に深紅の珠の見え隠れに連つて居るのを見た時の心持。脚は膝まで、手は二の腕まで葉末の露にひたして、丸々した紅玉ルビイを、草の枝から目籠に移す時の心持。一つの房に眞赤のから桃色、桃色のから白と、尖頭さきになるほど段々小さくなつて、行儀さきよく鈴生りになつて居る其の中から、小さい、若いのを痛はりつゝ、本生りもとの大きい眞赤なのを摘み取る時の心持。摘み終つて、目籠に山

古今里
古伊萬里とも書
く。慶長年間朝
鮮人李參平が肥
前(佐賀縣)の有
田で創めたる燒
物。

なす紅玉を携へつゝ、朝日に照されて、足をすゝいで、家に入
る時の心持。綺麗に洗つて、大きな古今里の皿に盛つて、食
卓に安置して、家内揃つて舌鼓を打つ時の心持。あゝ何と
いひませう。

或人は、文明とは家族一緒に卓を圍んで苺を喰ふことな
り。と言つたと申しますが、私は百姓をやりつゝ、さうして本
を讀みつゝ、苺を喰ふといふ事に於て、野蠻と文明と、土の趣
味と天の趣味とを同時に摺み得たやうに思ひます。

苺は澤山取れますが、一々砂糖をかけて食べることは、と
ても私共の能くする所ではありません。それ故、大抵は鹽を
ふりかけて食べます。それで非常に結構です。一週に一

私の郷里
山形縣米澤市。

度位は破格に砂糖を添へます。一倍うまく感じます。稀
には砂糖の外に牛乳を添へます。實に咽喉から佛になる
やうに感じます。かういふ場合に、子供等は、頭が策になり
さうだと言つて喜びます。何の事だか知りませんが、私の
郷里では、非常にうまい物を食べた時に、「頭が策になる」とい
ふのです。

餘つた時にはジャムを作ります。ジェリーも拵へます。
又苺酒なども作ります。そして、或はパンにつけて賞味し、
或は夏時分の飲料に致します。

私の苺畑は八疊間の三四倍もあります。それで一春
に、水菓子屋から買へば彼是十圓位に値する紅玉が取れま

練馬
大根の一種。

す。其の外に一昨年などは、春は其の畦の間に甲州馬鈴薯じやがいもを作つて二斗以上も取りました。秋は練馬ねりまを作つて相撲取の腕のやうな奴を百本以上も取りました。春の紅玉は其の副産物として、夏の茶褐玉ちあはれたまと秋の雪白根せつぱくこんとを與へて呉れるのです。

美味い話ばかりして、つい其の出處を言ふのを忘れて居りましたが、私の苺は六年前に余丁町の坪内先生から戴いて、片手に軽々と提げて來た、それが蕃殖して今日の隆運を來したのであります。

(五十嵐力一野草集)

余丁町

東京市牛込區余丁町。

坪内先生

故坪内逍遙。

五十嵐力

文學博士。早稲

田大學教授。山

形縣の人。明治

七年生。

五母 と 蘆

故郷の母をおもへば

片岡の蘆もなつかし。

さやくと風の渡れば、

靡き寄るゆふべの穗波、

わが母の眉を偲ばせ、

しめやかに雨ふる夜半は、

そことなき葉ずれの響、

わが母の聲音にまがふ。

片岡

しめやかに

聲音

故郷の母をおもへば、
かの青き蘆もなつかし。

少年時代に、私は東京を離れて、一年ばかり奈良の古都に
近い田舎で暮らしたことがある。生れて始めて両親の傍
を離れたので、私は明けても暮れても、東京の空を眺めては、
あの明るい銀座の街の灯を戀しがつた。

生え茂つて
コバルト色
紺青色。

私のゐた家の裏手は小高い丘になつて、そこには青い蘆
が一面に生え茂つてゐた。私の室の窓の障子を開けると、
すぐ眼の前にそれが見えた。晝間は丘の上にコバルト色

葦切
ヨシキリ。行行
子とも書く。燕
雀類に屬す。



戦ぐ
ソヨグ。
蘆の穂波

の空が覗いてゐた。をり／＼白い雲が流れた。蘆の中で
は、葦切が玉を切るやうな音を立てた。夕暮には、何處から
ともなく、次第に黒く煙のやうに迫る暮色の中を、冷たい夕
風がさや／＼と渡つて来て、蘆の細い葉を揺がせた。私が
一番好きなのは、この夕風に戦ぐ蘆の葉を見てゐることだ
であつた。あちらに黒く、こちらに白く、風に靡いて光りかけ
る蘆の穂波を見てゐると、それがいろ／＼に、人の眉・鼻・口な
どを描くやうであつた。殊にそれが優しい顔附に見えた
ので、私は懐かしい母の顔を思ひ出した。私はぢつと眼を
つぶつて、その蘆の生えた丘の面いつばいの巨きな白い母
の顔を想ひ浮べた。さうして、うすら冷たい風の中でひと

り「お母さん」と懐かしく涙ぐましく叫ぶのであつた。

その時分、私は毎晩一里の路を歩いて、奈良の町まで英語を習ひに行つた。嫩草山の麓に、キンポールといふアメリカ人のお婆さんが住んでゐた。もう七十に近い年で、年中眞黒い服を着て、赤く爛れた兎のやうな眼に、大きな眼鏡を掛けてゐた。その人に、夕方の六時から七時まで、英語の讀み方と發音を教はり、それから温かいおいしい紅茶を御馳走されて歸つて來る時分には、もう田圃の中の道には、とつぷり日が暮れてゐて、蛙の聲だけが諸方に寂しく聞えるのであつた。

かうして獨り丘の徑を下りて來る時に、兩側の蘆の葉の

嫩草山
ワカクサヤマ。
奈良市の東方に
ある小山。

囁く
ササヤク。

さら／＼と戦ぐ音は、恰も彼等が内證で何か囁きあつてゐるやうであつた。時には多數の人がその葉蔭に集つて、何かひそ／＼話してゐるのではないかと思はれることがあつた。さうして、その聲の中に、殊更聞き覚えのある懐かしい母の聲が聞き取れたやうに思へた。

しめやかに小雨の降つてゐる夜などには、取分けさうした感じが深かつた。室へ戻つて、戸を締めて床に就いてからも、優しく諄々と諭すやうな母の聲音が、いつまでもしみじみと耳元に響いてゐるのであつた。

その頃の母戀しさの心を、私は「母と蘆」といふ題でこゝに歌つたのである。

(西條八十―海邊の墓)

諄々

西條八十
詩人。早稲田大
學教授。東京の
人。明治二十五
年生。

六 飼ひもの

布巾
フキン。

臺所の棚の隅に、うす黒い布巾のやうなものをくしゃくしゃに丸めてあるのが目に入つた。お膳布巾の古いのも突込んであるのだと思つたので、

「布巾をこんなところに置いてはいけないね。」
といふと、まさか、

「それは、布巾ではございません。なかのお坊つちやまが、猫の洗濯をなすつたのです。」

と答へた。變なことをいふと思ひながらつまみ上げて見ると、成るほど猫であつた。白天ひる鶯う絨じゆうで拵びなへた猫の皮であ

つた。擴げると、丁度實物の猫の皮を開いた時のやうに腹で割かれ、四隅には四つの脚がついてをり首の上に鼻と口とを形づくつてゐる赤い絹糸は色が褪はせてゐた。尻しつぽつぼはと見るとこれは小指ほどの長さのものが、綿の入つたまま胴とは別になつてそばに轉がつてゐた。

よく聞いて見ると、昨日の日曜日に、Mがおもちやの天てん鶯う絨じゆうの猫があまり汚れてゐるから洗濯してやるといつて、中の詰物をひつ張り出し、流して石鹼をつけて一所懸命で洗つたのださうである。Mちゃんの猫の洗濯といふことが、それ以來家中の笑ひ話になつた。

この小學生はあらゆるものを飼ひたがる。今飼つてゐ

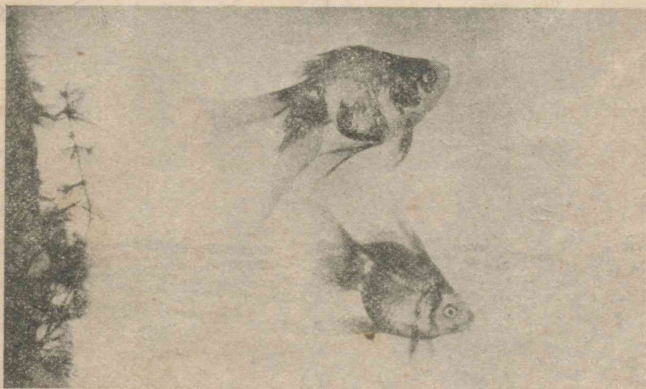
栗鼠
リス。哺乳類中
啮齒類の一種。

蒐集

るものを挙げると、左の通りである。

小鰕一匹、蟻三匹、金魚十尾、栗鼠二匹、子犬一匹。この中金魚以下の三種は兄弟の共有である。それから蠶七匹、蚤一匹、蛙の子四匹、蛤一つ。

此等の奇妙な蒐集のうちで、適當な棲家を貰つてゐるのは、玻璃鉢の金魚と、金網のついた箱の中の栗鼠と、小さい犬小屋をもつてゐる子犬くらいなもので、他はその雑多な組合せ



魚 金

に相當した變な容物の中に收容されてゐる。

小鰕と蛤とは小さいフラスコの中に、蟻はマツチの空箱の中に、蠶はカステラの箱に、蚤は藥の小瓶に、最後の蛙の子は大きな空樽の中に入れて、子供部屋のお父様からお譲りの大きなデスクの下にもち込まれてある。この蛙は、植物園の池でお玉じやくしからやつと孵化したばかりのところを苦心して捕へて來たのだから、最も大事な記念物である。同時に彼は、空樽が蛙たちに取つて故郷の池と變らない楽しい場所となるやうに工夫を凝らした。彼は樽に水を湛へ、底に泥を敷き、その中に二つの石を岩の如く水から抽んでさせ、間に草まで植ゑた。これは泳ぎに疲れた

湛へる

蛙を休息させるためであつた。

餌だけには少し困つた。理科の教科書は、蛙が水中の小動物を食物としてゐることを彼に教へた。しかし池中にゐるやうな小動物が新しい空樽の中に急に發生する筈はなかつたので、彼はビスケットやお煎餅のかけらで我慢して貰ふことにした。本當をいふと、お八つに戴くすべてのお菓子が蛙の餌であつた。デスクの前の椅子に腰かけ、お盆の上で自分を待つてゐる毎日の楽しみをお

お八つ
昔の八つ時、即ち今の午後三時頃に食する間食をいふ。



(畫古) 蛙

好奇心

過程

八つを食べる時には、彼の兩足は、いゝ足臺のつもりで屹度蛙の樽の上に載つてゐる。さうして同じお八つ仲間の兄弟達と、饒舌つたり笑つたりする度に盛んに口から飛散る菓子のかけらは、悉く下の蛙の樽の中にこぼれ込むから。Mがこの蛙の子を大事がるのは、生きものを珍らしがる子供の性來の好奇心と愛情とにもとづくのは勿論であるが、それでも子犬や栗鼠や金魚などに對するのとは別な、一種生物學的の興味がそこに働いてゐる。蟻や蚤を飼つてゐるのも同じ意味である。彼は蛙の現在の黒い上衣が、どんな過程を取つていつどんな色に變色するか、それを觀察したかつたのである。

郊外

所有權

行使法

彼は學校から歸つて來ると毎日新な期待をもつて、何より先に樽をのぞきこむ。帽子も脱がず、鞆も上靴袋もしよつたまゝである。この時彼のポケットには、ハンカチや、鼻紙や、白チョークの破片などと一緒になつて、桑の葉が一杯詰めこまれてある。家には桑の木がないので、彼は自分の七匹の蠶のために、郊外から通ふ友達に頼んで毎日新しい桑の葉を摘んで來て貰ふのである。栗鼠や金魚の如き共有物は、世話も兄弟お互で助け合つてゐるが、自分のと極つたものだけは、子供仲間の所有權に對する最も原始的な、それだけ恐ろしく嚴正な行使法によつて、自分でことごとく面倒を見なければならなかつた。日曜日になつて、貰ひた

田端

タバタ。東京市
瀧野川區。

谷中

ヤナカ。同市下
谷區。

めた桑の葉が使ひきつてゐるのが分つた時などは騒ぎであつた。彼は近くの田端の臺や、谷中の森の方まで桑の木を探しに行かなければならない。しかしそれほど手數のかゝる蠶でも、そのうちにだんく成長した蛙に比べれば、まだしも始末がよかつた。

胡桃

クルミ。胡桃科
に屬する落葉喬
木。



足場

蛙は、いつまでも樽の底におとなしくしてはゐなかつた。手足が伸び、胡桃形の胴ががちり縮まつて來ると共に、飛躍力も増大した。彼等は水からつき出た岩を足場にして、ばね仕掛の玩具のやうにびよんく樽の外へ飛出した。學校から歸つた小學生は、或日樽の中に蛙が一匹もゐなくなつてゐるのを見て吃驚した。彼はデスクの後に這ひこ

んだり、書棚をのけて見たり、大搜索の末やつと三匹のいた
づら者を、それらの隠れ場所から発見した。一度は一匹
の蛙が、どうしても見つからなかつた。デスクの前の窓か
ら庭へ飛出したのだといふことになつた。明けの日の朝、
彼等が自分達の蚊帳を疊んでゐると、驚くべき事には、迷子
の蛙が蚊帳の中から飛出して來たのである。

(野上彌生子—入學試験お伴の記)

野上彌生子
本名八重子。小
説家。翻譯家。
大分縣の人。明
治十八年生。

手をついて歌申上ぐる蛙かな

宗鑑

七 な おい おい

なぎさの砂は

ふるひにかけたやうにきれいだ

だれもゐない

砂の上には

小さな水鳥の足跡がある

それがとほくまで

ならべたやうにつゞいてゐる

その足跡をふんで

これもまた

かはい、あかんぼの足跡がある
きつと

その水鳥をつかまへようとでも思つて
よたよたと出かけたのかもしれない

だが、水鳥とあかんぼ

それだけか

それだけといふことがあらうか

よく見まはすと

おう、そこに

すこしはなれたところに

これもはだしの足跡があつた

あかんぼをきづかつて

あとからしづかに追ひかけた

それこそ

そのあかんぼの

わかい母親のであらう

にこにこした顔までがみえるやうだ

(山村暮鳥―暮鳥詩集)

山村暮鳥
本名土田八九
十。詩人。群馬
縣の人。大正十
三年歿。年四十
一。

クリミヤ
クリミヤ半島の
こと。歐羅巴の
東南、黒海に突
出する半島。

アルマ
クリミヤ半島を
流れて黒海に注
ぐ河。
インケルマン
クリミヤ半島の
セグアストボー
ル附近にある村
名。
捷報
セフハウ。
蹂躪
ジウリン。ふみ
にじること。
塵風

クリミヤの天使

一八五三年、露土兩國間の國交が斷絶するや、英佛二國は、トルコを助けてロシヤと戦つた。いはゆるクリミヤ戦争は即ちこれである。

英佛聯合軍は、幸にしてアルマやインケルマンの戦に勝つた。捷報は英國民の士氣を壯んにした。全國民は奮ひ立つた。然るに、間もなく悲惨な報告が傳へられた。それは、恐るべき疾病が忠勇なる軍隊を蹂躪しつゝあるといふことであつた。時方に炎暑の候、酷熱の塵風とともにコレラの病魔は英佛軍を襲うて、將校兵卒の斃死するものが相

襲うて
襲ひて

酸鼻

サンピ。

驚駭

キヤウガイ。

戦慄

センリツ。をの
のきおされるこ
と。

醸金
キヨキン。



像銅ルーゲンテイナ

繼いで、忽ち死人の山を築いた。一方疾病の爲に戦ふことの出来ないものが、一萬數千人の多きを算するに至つたが、しかも病兵は、病院の不足、看護の不行届のために、非常な悲惨を嘗めてゐるのだつた。

この酸鼻すべき報告は、全英國民をして驚駭戦慄させた。その子、その親、その兄弟、その夫を戦場に送つてゐるもの

は、何れも痛心憂慮した。そして慈善心と公共心とに富む國民は、これが救済のために醸金した。けれども、この場合、金よりも一層必要なものは、是等傷病兵看護のためにクリ

ナイチンゲール
英國の慈善家。
(二八二〇—
九一)

ミヤに往くべき人だつた。

この時、かゝる惨状を耳にしたナイチンゲールの心は、どう動いたらう。人形の片腕が折れた時でさへ涙を止め得なかつた彼女は、果してどう感じたらう。折しも彼女は聊か健康を害してゐたので、郷里に退いて、栗鼠の囁く木蔭や、小鳥の歌ふ森の間に日を送つてゐたが、到底クリミヤの惨状を坐視するに忍びず、今こそ自分の起つべき時である、君國のために盡すべき時である、これ神の命令であると自覺して、早速陸軍卿に請願書を送つて、自ら看護婦隊を組織して戦地に赴きたいと出願した。所が、不思議にもこれと入違ひに、陸軍卿からも彼女に向つて、傷病兵看護の大任につ

坐視

請願書

懇書
コンシヨ。

いて一考を煩はしたいとの懇書が送られたのだつた。そこで彼女は、これ正に疑もなく自分の使命であるとの自信を堅くした。

陸軍卿は、直ちに彼女の請願を許し、その行動に關する全權を承認した。彼女は、百方奔走の結果、遂に三十八名を以て編成した看護婦隊を引率し、同年秋十月下旬、英國を出發した。この行に關する英國の輿論は區々で、中には、かゝる重大な看護の任務を、かよわい婦女子に委せるのは輕舉である、と非難するものもあつた。これは當時の言論として、寧ろ當然だつた。

慈愛と正義と熱情に燃える彼女の一行は、十一月初旬ク

輿論
ヨロン。
かよわい

寂寞
セキバク。

義に
サキに。

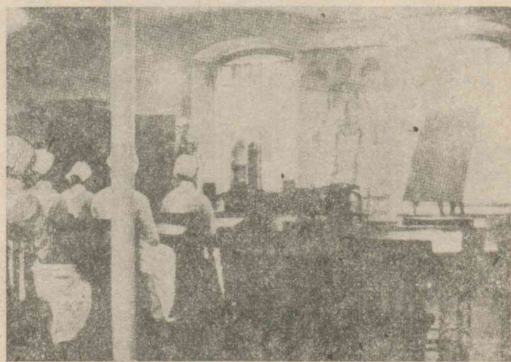
周到

憂慮
イウリヨ。

媾和
コウワ。

リミヤ半島に到着した。不潔と亂雜と惡臭とに満たされ
てゐた野戦病院は、清潔にされ、整頓され、寂寞と苦痛に哭い
てゐた可憐な傷病兵は、宛ら天使の訪れに遭うたやうに感
泣した。病勢が重くて所詮死を免れることの出來ないも
のも、尊い信仰の下に心の平和を得て瞑目した。
かくて兵士達の家郷に送つた書簡や、從軍記者の發した
通信は、全英國民を擧げて彼女を歎美させ、曩に非難した人
人までも、悉くその偉勳を賞揚して、我もくと義金を醸出
した。五百萬圓の巨額は、忽ち彼女の事業費に充てるべく
送られた。しかし、彼女は少しもそれを自分の功績とは思
はなかつた。たゞ自分の使命を遂行してゐるのに過ぎな

いと考へてゐた。そして、この金を以て、更に完備した病院
を建てて、傷病兵の看護、慰安を周到にすることに努めた。
かゝる激烈な勤務の中に、彼女は
幾度か病魔に襲はれたので、人々は
これを憂慮して、頻りに歸國を勧め
たけれども、彼女はもとより神に捧
げた體、こゝで死ぬのも神の御旨で
ある。といつて、一向これに應じな
かつた。



室一の院病スマト-トシセ

一八五六年、幸にも英・佛・土・露・奥・普の使臣の會議によつて
媾和が成立した。遠征軍は、歡喜の情に溢れながら凱旋の

厭うた

ヴィクトリア女
皇

英國の女皇、(一
八一九—一九〇

象徴
シャウチヨウ。

途に上つた。彼女は、なほも留つて残務を整理した後、國民の歓迎を受けることを避けるため、變名して旅程に上り、竊かに懐かしい父母の家に歸つた。彼女は、右の手の行うた善事を左の手に知らせることさへも厭うたのだつた。しかし、彼女の歸國したことは、程なく人々に知れ渡つた。賞讃、歓迎は、雨の如く、霰の如く、彼女に降り注いだ。「私は神の前で、私の盡すべき義務を行つたのに過ぎません。」彼女は、たゞかういつて、靜かな家郷に疲れた心身を養ひながら、神の恵を感謝してゐた。

ヴィクトリヤ女皇は、彼女の功勞に感謝の意を表するたため、特に慈悲、平和、慈善の諸徳を象徴する十字架を意匠とし

賜うた

徽章

キシヤウ。

野邊地天馬

本名は三右衛門。著述家。岩手縣の人。明治十八年生。

た高貴な賞牌を賜うた。現今全世界の赤十字社が採用してゐる徽章は、即ちそれである。その後、國民によつて贈られた巨萬の金額を以て、ロンドン市外のセントトマス病院の構内に、宏大なナイチンゲール院を建てて、ひたすら有爲な看護婦の養成に努めることにした。

彼女の事業と精神は今もなほ生きてゐる。そして、幾多の婦人をして獻身犠牲、慈愛の尊い道に奮ひ起たせつゝあるのである。

(野邊地天馬—近世偉人物語)

九 水郷夏趣

眞菰

禾本科に属する多年生草本。

ばん

涉禽類に属す。



ごゐさぎ 五位鶯 涉禽類に属す。



くひな 水鶏 涉禽類に属す。

水郷の夏、眞菰の茂りに小舟を乗り入れると、水鳥がばつと飛び立つ。ばん、ごゐさぎ、くひな、かいつぶりのよしきりの類。

眞菰の根方、水とすれくゝの處に、孟蘭盆の精靈棚のやうに草を編み合はせた鳥の巢が、彼方にも此方にも浮いてゐる。これが水の増減に任せて、自ら高くもなれば、低くもなる。巢の上には程よく草の葉がかぶさつて、一寸鳥の巢とは見えぬが、此の草の葉を取除けると、其の下に小さな卵が十箇許り列んでゐる。水鳥の卵だけに、卵が水につかつて



かいつぶり 鴨類、游禽類に属す。



孟蘭盆

ウラボン。七月十五日の佛事をいふ。普通省略して、單にボンと稱す。精靈棚 シヤウリヤウダナ。

ゐる。かいつぶりとよしきりとのだと、人が教へてくれた。眞夜中にふと目を覺すと、静寂のうちに鎖された天地の中に、星屑の瞬く外は、この世に生動してゐるもの、何一つあるとも覺えぬところに、ひゆら、ひゆらと、細い悲しげな聲で、かいつぶりの鳴く聲が水の上から傳はる。遠く近く、東に西に、何處を何處とも定めなく鳴く音の聞えるのは、人影一つ見えぬ湖の闇に、此の世を我が世とばかり飛びかはしてゐるものと見える。

かいつぶりの鳴く聲を聞くのは闇がよい。かいつぶりの聲が闇によくば、よしきりの聲を聴くのは、月明の夜がふさはしい。晝間は少しうるさいが、夜、月明に

シェレー
英國の詩人。(一
七九二—一八二
二)
スカイラーク
雲雀。

湖水の水が庭の松が枝をくゞつて見ゆる時、静かによしき
りの聲を聴いてをれば、如何にも心のびやかなるを覺え
る。これが卵を生み、雛を孵すやうになると、はたと鳴^なを静
めて、何處にあるか分らなくなる。シェレーが雲雀の鳴く
音に擬したスカイラークの詩を學んで、よしきりの鳴く音
を歌つて見ると、まづかうもあらうか。

行行子がなく

行行子が鳴いてるとやうに

行行子がぎようぎようとなく

日すがら夜すがら

水近き眞菰の中

そよ風になびく蘆の葉かげに

行行子がぎようぎようとなく

ぎやぎやぎやぎやあ

ぎやぎやぎやぎやあ

布袋葵
ホテイアフヒ。
みづあふひ科に
屬する一年生草
本。
河骨
カウホネ。睡蓮
科に屬する多年
生草本。



睡蓮
睡蓮科に屬する
多年生草本。
野趣
ジニサイ。睡
蓮科に屬する多
年生草本。



夏が至る毎に、湖面に名も知れぬくさくさの草が花を開
く。布袋葵の紫や、河骨の黄など、色とりどりの花が咲く。
野生の睡蓮が、黄がかつた白い花をつける。花は小さいが、
野生だけに一種の野趣が溢れて愛すべきである。見たこ
とはないが、蓴菜も沼の何處やらに花が咲いてるさうな。
水底に生ふる藻が夏は茂つて、水の中を見下すと、澄み切つ
た水の底一面がさながらの叢となつてゐる。草の冬枯れ



真 菰

杉村楚人冠
名は廣太郎、朝
日新聞社顧問、
和歌山市の人、
明治五年生。

たどくと

て夏茂るのは知つてゐるが、水底の藻も冬は枯れて夏茂ることを永い間知らなかつた。この藻屑が肥料になると、朝靄の晴れやらぬ頃から、小舟に棹さして、これを引揚げてゐる人の姿も、夏の趣を見せる。

夏の朝、何處を指して何處に行くといふこともなく、小舟を乗り廻す。蘆をわけ、真菰を開き、藻の花に乗り、河骨の上に浮ぶ。夏の夕べ、夕闇の迫る岸の細道をたどくと行けば、人もなげに螢がすれすれに飛びかひ、遠くとのみ聞きなした梟が、ほろくとつい頭の上で鳴く。折ふし野らから歸る頬被り姿の可笑しいのが、すれ違ひさま道を譲つて、挨拶して行き過ぎるのも親しげで嬉しい。(杉村楚人冠「續湖畔吟」)

一〇 静かな日

一 チャンバアレン先生

遙かな海のあなた、西の國邊を蔽ふ戰の雲は、いつ晴れよ

うともせぬ。久しく御消息を

きかない王堂チャンバアレン

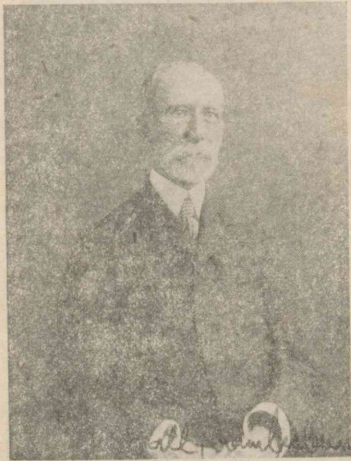
先生は、どうなさつたであらう。

餘程前に、手紙と書物をお送り

した以來、お便りが無い。いつ

もすぐにお返事がくるにとお噂をしてゐたのに、或朝ねも

ごろなお手紙を頂いた。中にも、戦争に對する御感想がい



ンレァバンヤチ

チャンバアレン
號は王堂。言語
學者。早くより
我が國に來朝
し、嘗て東京帝
國大學教師た
り。後、辭して餘
生を瑞西ゼネ
ヴァに送り、同
地に於て客死す。
年八十六。(一八
五〇—一九三
五)
戰の雲云々
この文、世界戰
争中の執筆に係
る。

ねもごろ
ねんごろ。

痛はし

ろいろ書いてある。「如何なる時でも理想の境へ遁れ得る自分を喜ぶ。」とあるのを見て、何が襲はうとも先生は幸福な方であるとしみじく嬉しく思つた。眼はだんじくお悪くなるこのことで、文字も曲つて居る。いつまでかういふお手紙がお書けになるやら、お痛はしく思ふ。子供らに賜はつた繪葉書を、説明してやりながら、涙がにじみ出た。

二 秋 草

芙蓉 錦葵科に属する
落葉灌木。
紫苑 シラン。菊科に属する多年生草本。
おほらか

秋の庭は、萩や芙蓉の眞盛りである。薄も穂に出、紫苑も咲きにほひ、雨は雨でうつくしいとながめ、うす日照る日は更に得がたい美しさをあかず見てゐる。女の心もかくありたい。おほらかに、なだらかに、しつとりとした美しさを

理窟

紅葉山人 尾崎紅葉。本名徳太郎。小説家。東京府の人。明治三十六年。明治三十七年。年三十七。

齋藤緑雨 本名賢。小説家。評論・隨筆家。三重縣の人。明治三十七年。年三十八。

もちたい。ともすれば、意地や理窟でとげくにならうとする自分の心持を思ふごとに、ぞつとする。

三 寒 い 朝

「あゝ降つたる雪かな。一寸お見舞申上候。」これは大雪



紅葉の葉書

の日に、紅葉山人から送られた葉書の句であるが、今でも寒い日などには、その短い句から、それを書かれた紅葉さんの面影が、はつきり思ひうかべられる。

かつてある高等女學校で、齋藤緑雨といふ名を先生が問うたのに、誰一人知つてをる人がなかつたこのことを聞いて、

小川町
東京市神田區小
川町。
皮膚

小川町の家に来られた緑雨さんの皮肉な微笑が思ひ出されたことであつたが、今また緑雨さんや紅葉さんを知つて居る自分の年をとつたにも驚かされる。

四時計

古い懐中時計が三つばかりある。何度時計屋の世話になつたかしのれない。いくら修繕してもよくならぬらしい。毎日根氣よく正午に合はせてみても、三つが三つながら違つてゐる。以前は腹もたてた。漸く此の頃あきらめかけてゐるものの、いよく手にとつてみる迄は、或はといふ願の糸が、心のどこかに懸つてゐるやうな氣がする。同じ時刻に同じ事をくり返しながら。

(佐佐木雪子—西片町より)

願の糸

佐佐木雪子
東京府の人。
明治七年生。

根氣よく

一一 七月の星座

毎年夏になつて、そろ／＼夕方の風が戀しい頃になると、物置にしまつてある竹製の涼み臺が中庭へ持出される。これが持出される日は、私の單調な一年中の生活に、一つの著しいくぎりを附ける重要な日になつてゐる。まう明日あたりは涼み臺を出さうぢやないかといふ事が、誰かの口から言ひ出される。しかし其の翌日が雨であつたり、さうでなくても、色々の事に紛れたりして、つい一日二日と延びる。其の中にいよく、今日はと云ふ事になつて、朝の内に物置の屋根裏から臺が取下され、一年中の塵埃や黴が、ぬれ

單調
變化のなきこ
と。

黴
カビ。

雑巾で丁寧に拭ひ清められ、それから裏庭の日影で乾かされる。そしていよ／＼夕方になつて中庭に持出されると、それで始めて私の家に本當の夏が來たといふ心持になるのである。

涼み臺の外に、折疊み椅子が三つ、同時に並べられて、一同が中庭へ集る。まだ明るい宵の中には、繩飛をする者もある。寫生帖を出して、おばあさんの後姿をかいてゐる者もある。明朝咲く朝顔の蕾を數へて報告する者もある。幼い女兒二人は、縁側へ色々な花を並べて花屋さんごつこをする事もある。暗くなると、花火をしたり、お伽噺をしたり、おばあさんにお國の話させたりしてゐる。幼い子等に

後姿

幻像
ゲンザウ。

家鴨
アヒル。

は、まだ見たことのない父母の郷國が、お伽噺の中の國のやうに、不思議な幻像に満たされてゐるやうに思はれるらしい。例へば、郷里の家の前の流に家鴨が澤山遊んでゐて、夕方になると、上流の方の飼主が小舟で連れに來るといふやうな、何でもない話でさへ、何かしら一種の夢のやうなものを、幼い頭の中に描かせると見える。それでいつもお國の話をおねだつては、おしまひに「あたしもお國へ行きたいなあ。」と一人が云ふともう一人が同じ言葉を繰返すのである。子供等の亡祖父の若かつた頃の昔話も屢々出る。私自身が子供の時分に幾度も聞かされた話が、また同じ母の口から出るのを聞いてゐると、それがもう遠い／＼昔の出來事だ

會津戦争
 明治元年、會津藩主松平容保が奥羽越後の諸藩と聯合して反せし時の戦。
 西南戦争
 明治十年、西郷隆盛の反せし時の戦。
 淨化
 純化
 をさめる

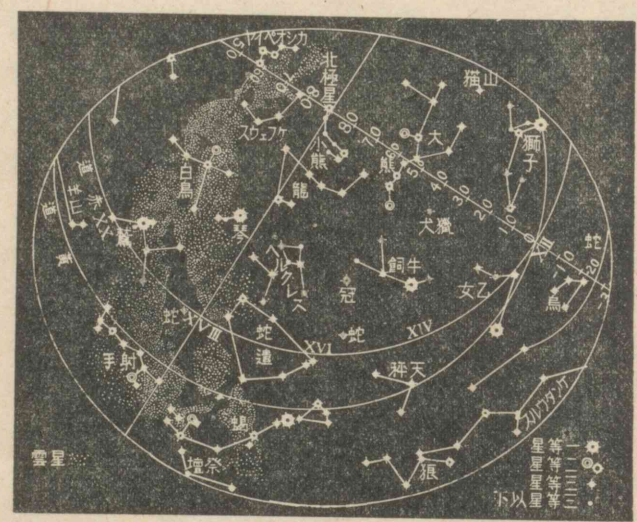
あつて、數年前まで生きてゐた私の父に關する話とは思はれないやうな氣がする。まして祖父を見た事のない、或は臆げにしか覺えてゐない子供等には、會津戦争や西南戦争の昔話は、書物で見る古い歴史の斷片のやうにしか響かないだらう。そしてそれだけに、却つて祖父に對する懐かしみは、淨化され、純化されて、子供等の頭の中の神殿にをさめられるだらうと思はれる。

今年の夏、涼み臺が持出されて間もなく、長男が宵の南方の空に輝く大きな赤味がかつた星を見つけて、あれは何かと聞いた。見るとそれは火星であつた。星座圖を出して來て、其の上に鉛筆で現在の位置をしるし、其の脇へ日

遊星
 太陽の周圍を週行する星。

動機

星宿



七月の星座

氷のやうな光を投げてゐた。

附をかいて置いて、此の夏中の此の遊星の軌道を圖の上で追跡して見ようといふことにした。それが動機となつて、子供は空のよく晴れた晩には、時々星座圖を出して、目立つた星宿を見較べてゐた。其の頃は、まだ織女や牽牛は、宵の中にはかなり東にあつた。西の方の獅子宮には、白く大きな木星が、屋根越しに

素人
シロウト。

空を眺めてゐるうちに、時々流星が飛んだ。私は流星の話をすると同時に、熱心な流星観測者が、夜中空を見張つてゐる話をして、それから新星の発見に關する話もして聞かせた。おもだつた星座を諳記してゐれば、素人でも新星を発見し得る機會はあるといふ事も話した。

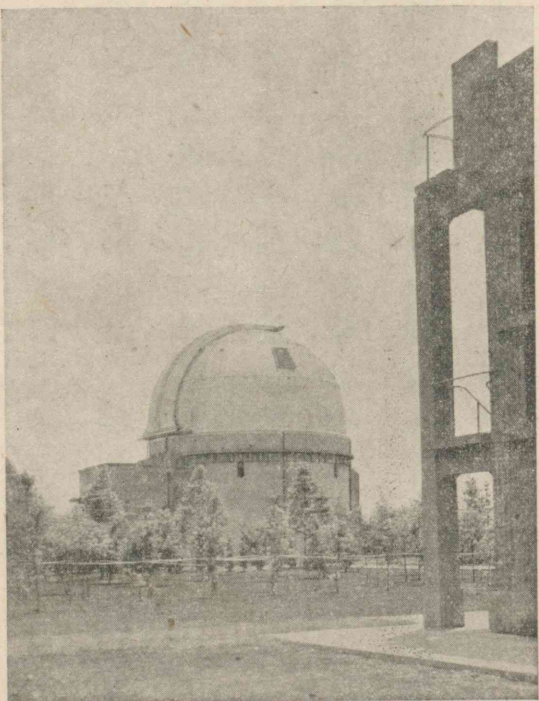
莫大

一秒時間に十八萬六千哩を走る光が、一箇年かゝつて達する距離を單位にして測られるやうな、莫大な距離をへだてて散布された天體の二つが、偶然接近して、新星の發現となる機會は、譬へば盲龜が百年に一度大海から首を出して、孔のあいた浮木にぶつかる機會にも比べられる程少いさうであるが、天體の數の莫大な爲に、新星の出現は、それほど

盲龜云々
法華經その他の
經典にある句。
容易に會ひ得ざ
るにたとふ。

宇宙

珍らしいものではない。唯光度の著しく強いのが割合に稀である。こんな話よりも、子供を喜ばせたのは新星の光が數十百年の過去のものだといふ事であつた。我が家の先祖の誰かが、何處かでどうかして、ゐたと同じ時刻に、遠い宇宙の片隅に突發した事變の報知が、やつと今の世に、此の世界に届くといふ事であつた。



天文臺

八月になつてから、雨天や曇天が暫く續いて、涼み臺も片隅の戸袋に立てかけられたまゝに幾日も経つた。

或朝、新聞を見てみると、某理學士が流星の觀測中、白鳥星座に新星を發見したと云ふ記事が出てゐた。其の日の夕方、涼み臺へ出て、子供と共に其の新星を搜したら、すぐ分つた。暫く見なかつた間に季節が進んでゐる事は、織女、牽牛が宵の中に眞上に來てゐるのでも知られた。そして新星はかなり天頂に近く、白鳥座の一番大きな二等星と光を争ふほどに輝きまたゝいてゐるのであつた。

「暫く怠けたので、新星を發見しそこなつたね。」と云つたら、子供はどう思つたか、顔を眞赤にして面白さう

二等星

に笑つてゐた。

其の中にまた曇天が續いて、朝晩はもう秋の心地がする。どうかすると夜風は涼し過ぎる。涼み臺もつい忘れられがちになつた。従つて星の事も、もう子供の頭からは消えてしまつてゐるらしい。新星の今後の變化を研究すべき天文學者の仕事は、これから始まるので、學者達は毎晩曇つた空を眺めて、晴間を待ちあかしてゐる事であらう。

(吉村冬彦「冬彦集」)

吉村冬彦
本名は寺田寅彦。理學博士。東京帝國大學教授。高知縣の人。昭和十年歿。年五十八。

一二 眞夏の海

湛へて

青空のもとに湛へて

眞夏の海は輝く

南極と北極とを繋いで

島と船とを浮べてゐる

松林を通り抜けて

熱砂の丘を越えれば

打寄せる浪がしらに

人は魚のやうに戯れてゐる

熱砂

浪がしら

轟然
グワウゼン。

青い海から盛り上つて

轟然として白く崩れる波

走り狂つて磯に遊ぶ

海の子のおもしろさ

抜手を切つて波に乗れば

陸全體が躍つてゐるやうだ

眞夏の海は輝く

高いく青空のもとに

燕嶽

長野縣にあり、北日本アルプス中の一峰。

中房

同縣南安曇郡有明村の山中にある温泉場。

燕の小屋

燕嶽の頂上近くにある。

松蘿

地衣類の植物の一種。

這松

松杉科に屬する

常緑喬木。

裏白ななかまど

薔薇科に屬する

落葉灌木。

白樺

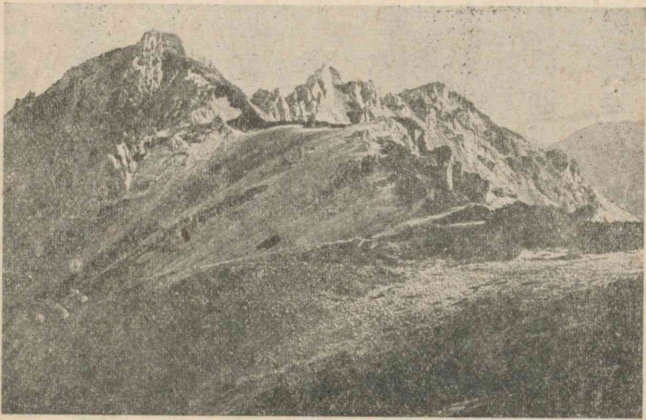
樺木科に屬する

落葉喬木。

一三 燕嶽の壯觀

中房から更に四千餘尺をひた登りに登つて、吾々は燕の小屋に到達する。

最初の間、熊笹の茂つた道や、松蘿まつらの垂れさがつてゐる針葉樹の密林は、中房に來る道の、明るい柔かみのある奥深さに對照して、一種の狹苦しさと單調とを感じさせるが、巔に近づくに隨つて、登攀の道は次第に緩傾斜となり、眼界は次第に廣闊となる。這松と交互して生え擴がつてゐる裏白ななかまどなななかまどの葉の美しさ。底知れぬ谷底まで生え續いてゐるらしく見える柔かな草原の斜面に、白樺の大木の處々



燕嶽

に群をなして立つてゐる姿の力強さ。青草の原を斜に貫いて見え隠れしつゝ、緩やかに巔を目ざして行く道の兩側に、白や、黄や、淡紅や、淡紫の花をつけた、高山植物の咲亂れてゐる氣高きいぢらしさ。――總じて、高山の上にある一種特別な柔かな美しさは、豊かに登山者の眼前に展開される。

隨つて、東北の風が谷から濃霧を吹上げて、白樺の幹を遠く

雷鳥
鶉類に屬する
鳥
大天井
燕嶽の南方に連
なる。
咫尺の間

東天井
大天井の東南に
連なる。
鎗が嶽
北日本アルプス
の最高峰。

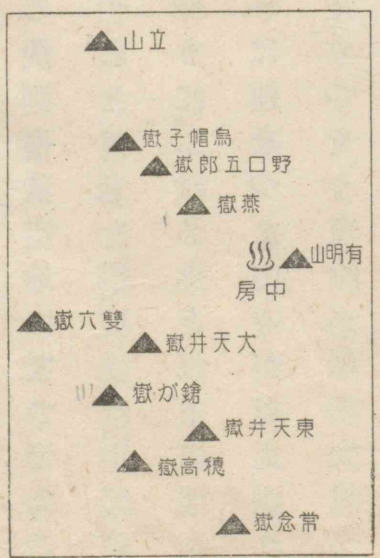
常念
東天井の東西方
にあり

太平樂

見せ、草原の廣さを限りなく見せてゐた。さうして、この霧の中に隠れて、雷鳥の啼く聲が間近に聞えてゐた。私は大天井と燕の絶頂との追分に立つて、覺束なく、四邊を見まはしたあとで、漸く咫尺七寸の間に建つてゐる燕の小屋を霧雨の間に認めることが出来た。

燕の小屋は、九千尺の山上としては、勿體な過ぎるほどに完備したものである。私が小屋に著いたのは晝前であつたが、風は益吹募り、雨が時々強く打ちつけて來るので、その夜は此處に一泊する事にきめて、櫓火ぼたびの傍で偶然に落合つた色々の人の話を聞いてゐた。十四と十六との娘二人をつれて、これから大天井、東天井を縦走して、鎗が嶽に登ると

いふ京都の會社員がある。今朝、強風に逆らつて常念から來て、中房へ降りる中休みにこの小屋に寄つたのだと言つて、二合の酒を飲んで太平樂を並べる江戸つ兒の水兵がある。六十七にもなる老父をつれて、やはり鎗が嶽まで行つて見ると言ふ地方紳士がある。その他、強力や學生の二三の人も往つたり來たりして、或者は降り、或者は泊り、雨の聲と風の音との中に山上の日は暮れて行つた。蚤に攻められて眠りにくかつた夜の二時半頃、ふと眼が



肅然

牆壁
シヤウヘキ。か
きとかべ。

覺めて外に出て見ると、まう風はすつかり止んで、月が雲の間からその光を漏らしてゐる。昨日一日、霧のために見えなかつたアルプスの主脈が、この分ならば見えない事もあるまいと思つて、小屋の背後の觀測臺豫定地になつてゐる臺の上に登つて見た。さうすると、月光を半ば受け、半ば遮られて、ほのかな白銀の綿のやうに、ふはくと眼下に浮んでゐる雲の間から、牆壁のやうに連なつた山々が見え隠れして、西南の端近く、高塔の聳え立つやうな鎗が嶽の大鎗が、すぐ眼の前に、天を刺さうとしてゐた。私は山上の月夜を見ようとすする願の遂に叶へられたことを喜んだ。この怪しく明暗の隈の入亂れた月光の中に、肅然として、一萬一千

徂徠
ソライ。ゆき
き。

淺間

東方遠く群馬縣
との境にある活
火山。
戸隠
北方遠く新潟縣
との境に近く聳
立する連山。

有明山

信濃富士とも稱
せられ、中房の
近くにあり。

尺の峻峰と、これを掠めて徂徠する雲とに對して立つ心持は、實に何とも言へなかつた。
この嬉しさを他の人々にも分ちたかつたので、再び小屋にはひつて、寝てゐる人達に知らせた。皆起きて來て話しかつてゐる間に、まう曉が近づいて來た。東が次第に白んで來て、ちやうどそちらに向いてゐる窓の硝子に、ほのかな色がさして來る。急いで外に出て見れば、淺間の左、戸隠の右、名も知らぬ山の巔とすれすれに帶を引いてゐる黒雲の間から、朝日が將に出ようとしてゐるところだつた。昨日は仰いで見て來た有明山の峰も、今は脚下に低く黒く見え、てゐるに過ぎない。

穂高嶽
 鎗が嶽に連なり、その南にあ
 立山
 北日本アルプス
 中の一峰
 東鎌尾根・西鎌
 尾根
 鎗が嶽の東と西
 とに續く尾根
 で、縦走に困難
 なる處
 雙六嶽
 鎗が嶽の西北に
 聳ゆ
 野口五郎嶽
 燕嶽の西方に大
 溪谷を隔てて聳
 ゆ
 烏帽子嶽
 野口五郎嶽の北
 方に連なる一
 峰
 雙
 ヒダ
 障壁
 シヤウヘキ。へ
 だてのかべ。

振返つて西の方を見れば、昨夜の浮雲は悉く晴れて、大天
 井や東天井の峰續きと、燕嶽の絶頂とを兩端の框とした前



朝の嶽燕

列ねてゐる。

景の中に、南は穂高から、北は立山
 まで、鎗が嶽や、東鎌尾根や、西鎌尾
 根や、雙六嶽や、野口五郎嶽や、烏帽
 子嶽などの諸峰が填込まれて、谷
 底から始まつて、複雑な襞を刻ん
 で、巔に至るまでの全山容を露出
 しつゝ、すぐ眼の前に、一萬尺を出
 入する峻峰を障壁のやうに立て

和毛
 ニコゲ。

私どもがこの大觀に見とれて、前を見たり後を見たりし
 てゐる間に、日は黒雲との戦に勝つて、その眩しい姿を現し
 て來た。さうして、その最初の光が脚下に投げられた時、こ
 の大きく峻しい北日本アルプスの主脈を背景として、何と
 いふ可憐な光景が眼前に展べられたことだつたらう。今
 までは陰にゐて目立たなかつた高山植物の花が、宿つてゐ
 る露とともに急に輝いて來た。しかもその中でも最も目
 立ちさうもない花や、鳥の和毛をつけたやうなぼやくと
 ぼやけた花などが、その數多い小さい實や毛に、無数の日光
 を反映して、とりわけ美しい輝きを見せた。私は此處にも
 亦高山の上にある特殊の清らかな愛らしさを發見して、嬉

阿部次郎
哲學者。評論家。
東北帝國大學教
授。山形縣の
人。明治十六年
生。

しさに堪へなかつた。
併し、こんなに快く晴れたのも、僅かに早朝の一二時間で
あつた。初めに鎗が嶽の鎗の頭を照らした日の光が、次第
に這下つて、周囲の諸山の巔にも光がさし始める頃には、霧
がまた立ちこめて來た。さうして、私とその朝、燕嶽の絶頂
に登つて、其處から下山の途に就く頃は、花崗岩の石砂が沙
漠のやうに擴がつてゐる白い斜面の上を、灰色の霧が行方
も知らず這過ぎて、たゞ處々、天の筈のやうに突立つてゐる
巖石の影が、ぼかりくと霧のまぎれにその姿を見せてゐ
るに過ぎなかつた。

(阿部次郎—北郊雜記)

本課の文は、丹
那トンネル開通
前の作なり。

下關
山口縣。開港
場。九州。朝鮮
連絡の要津。

氣候

葛
ちらほら
茸科に屬する多
年生草本。

一四 旅人となりて

今朝八時半の特急で、下關まで一氣に走ることたしまし
た。避暑の客や何かで込合ふことだらうと思つてゐまし
たが、さほどでもなかつたので大助りでした。

東京を立つた時は、珍らしく細雨を見ましたが、横濱あた
りからすつかり晴れて、またもとの蒸し暑い天氣になりま
した。

青い山、青い畑が、鐵道線路を挟んで迫つて來ると、谿間に
も野の面にも、白百合がちらほらと見えます。葛の花や朝
顔が、畑にも、家のまはりにも咲いてゐます。空も山も流も

轆轤
レキロク。車の
さしる音。

國府津
神奈川県足柄下
郡にあり。東海
道本線の驛。

箱根
足柄下郡にあ
り。

乙女峠

神奈川県・静岡兩
縣界にある峠。
箱根・足柄二道
の間道。

カーペット

毛氈。

離々

光に輝いてゐます。

眼を閉ぢて轆轤たる音を聴きます。汽車はひたすらに
光の野を西に走ります。

國府津に著いて始めて海らしい海を見、山らしい山を見
るのは嬉しいことです。箱根や乙女峠には雲がかゝつて
ゐます。

箱根に入つて、さすがに高原らしい涼しさを覺えました。
文字通りに青いカーペットを敷いたやうな裾野には、明方
の星をばらまいたやうに、白い百合が咲きこぼれてゐます。
線路に沿うた圓い柔かな線を描いた丘には、離々たる青草
の上に盛上げられたやうにして白百合が咲いてゐます。

合歡木の花も石竹も女郎花も、一樣に青嵐と芳草のうちに

七月の光を浴びてゐます。

川は痩せてゐます。白い礫の
上を滑る清冽な水は、青い山の根
を縫うては、青い嵐のなかに隠れ
て行きます。蓑を被て深潭に釣
を垂れてゐる男もあります。高
原を走る汽車を見下して、更に高
い山道を歩いてゐる少年の群も
あります。乙女峠には雨が降つ



合歡木
荳科に屬する落
葉亞喬木。
女郎花
をみなへし科に
屬する多年生草
本。

青嵐
清冽
深潭

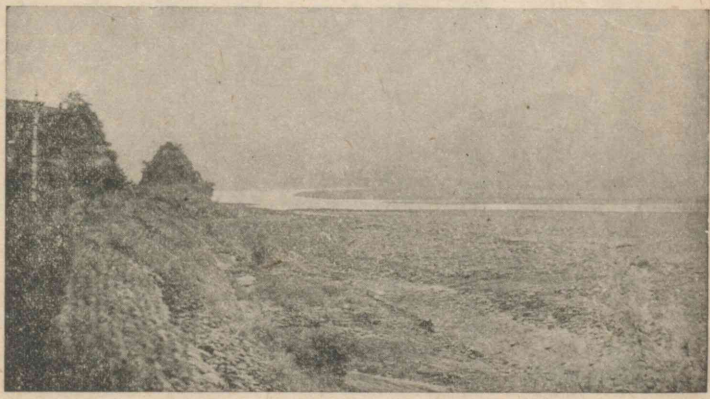


乙女峠より富士を望む

てゐます。

「富士山は見えますか。」

私は突然隣の男に沈黙を破られました。その男は始めて日本を旅行した臺灣人でありました。富士は雲に鎖されて見えませんでした。私はこの旅人に對して氣の毒に思ひました。私は微かに雲霧の間にほの見えてゐる富士の稜線をたどつて、その男に富士の形を説明しました。



川井大の雨

汽車は裾野を三島の方へ走つてゐます。時々横なぐり

三島
静岡縣田方郡。

稜線

時雨
シケレ。

雨の脚

薰風

に時雨のやうに寂しい雨が降つて來ます。斜に打ちつけられた雨の脚が、まだ乾ききらぬ間に、正午の太陽が焼くやうに硝子窓を射ます。けれども、高原の風は青く薰つてゐます。禁喫煙の禁を犯して煙草を喫かしてゐる男もあります。けれどもこゝでは、それを憎む氣にはなれません。薰風と青嵐との間につゝまれた人間の集合は、自然が生んだ可憐な嬰兒の遊戲に過ぎません。彼等の行爲は凡べてさながらのもの、善きものとして受入れられることが出来るやうに思はれます。

私は幾度か小さな行李から本を取出しました。けれども私は直ぐ本を捨てました。どうしてこの偉大な自然か

緒い
アカい。

雲の峰

四十雀

シシカカラ
燕雀類に屬する
鳥。

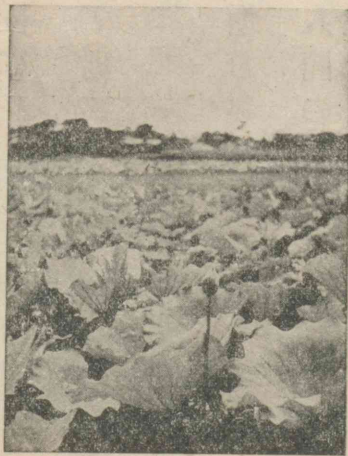


ら私の眼を離すことが出来ませう。

桑の畑・芋の畑・黍の畑をへだてて、汽車は富士を中心に大きな圓を描いて走つてゐます。黍の緒い穂の上に雲の峰がかゝり、四十雀の唄が聞えてゐます。

馬洗ふ男の子供たちの上に煙をのこしつゝ、汽車は鐵橋を渡つてゐます。

うとくと眠つてゐた眼に、紅い蓮の花の咲いた田が長く長くつゞいてゐるのが映ります。淡い薫りが夢を誘ふやうに窓を襲うて來ます。一羽の白い鳥が紅い花の上を靜かに翔んで



すちは

抒情詩

伊吹山

滋賀・岐阜兩縣界にあり。

關が原

岐阜縣不破郡

醒が井

滋賀縣坂田郡

聯想

夏草の句

芭蕉の句に、「夏草やつはものどもが夢のあと。」

桔槔

ハネツルベ。

行くのが、靜かな抒情詩を讀んでゐるやうな心持を喚び起します。おひく、陽がかげつて行きます。伊吹山の白く頽れた傾斜面が、午後の太陽をまともに反射してゐます。

關が原や醒が井などいふ聯想の多い驛が続きます。芭蕉の夏草の句を想はせるほど、山も平野も青々としてゐます。この附近から西は、野の百合が紅くなります。

湖水に沿うた村々の家の白い壁に、力ない夕陽の影が動いてゐます。田や畑の隅々に小さな木立があつて、そこには青い竹で作られた桔槔がかゝつてゐます。若い女たちが二三人づつで耕作物に井戸の水を撒いてゐます。二段にも三段にも水車をかけて湖の水をかい出してゐるのも、

深紅
シク。

瀬多の流
琵琶湖より流出し、宇治に至りて宇治川となる。

逢坂山
滋賀縣と京都府との境にあり。

賀茂川
京都市の東部を流れ、淀川に注ぐ。

水郷の感じを深くさせます。

比叡の峰は曇つてゐます。黒い雲を破つて深紅の夕焼が、湖面を壓するやうに燃えてゐます。瀬多の流に群をなして白い鳥が眠つてゐます。

逢坂山のトンネルを抜けると、大きな角の半がのそくと荷車を曳いて、近江の方へ歩いてゐます。黄昏は牛の背に落ちかゝつてゐます。

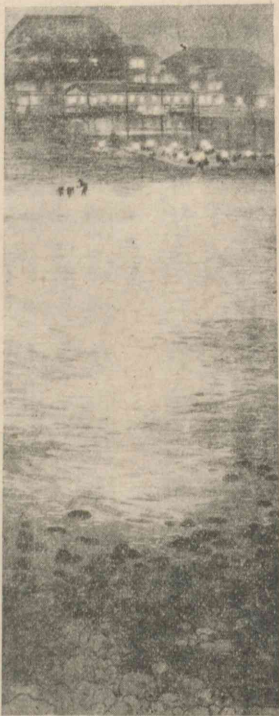
日はとつぷり暮れました。

紅い提灯の燭が、暗のなかに幾段にも幾段にも重なつて流に沿うて映つてゐます。

賀茂川の灯！

思ひなし

人々は窓を明けて、闇の底に紅い灯を見出してゐます。長いプラットホームに下駄の音が響きます。思ひなし



賀茂川の灯 川本参江筆

か、下駄の音までがゆつたりと聞えます。

人々は大方出て

旅路

行つてしまひました。新聞紙や折などの散らかつた薄暗い室の中に、私はまたこれから先の二百里餘りの旅路を想つてゐます。

さすがに旅らしい寂しさが、どことなく漂うてゐます。

吉田絃二郎
名は源次郎。小説家。佐賀縣の人。明治十九年生。

(吉田絃二郎―生くる日の限り)

一五 國境に立ちて

先ほどからの強雨は、いくらか細めになつたが、雫は細身の蝙蝠傘を透して、私は全くのづぶ濡になつてしまつてゐた。私は黒の背廣の上に薄緑のレインコートを著け、白の運動帽をかぶつた上から、浴室用の厚いタオルをかぶり、それも吹飛ばされないために、その首根をまた一つの薄手なタオルで、後からきつと引締めて、顎下で結んで、餘りを長く垂れ下げた。まるで白い兜を冠つた川中島の信玄と云つた風である。

かうして私は、國境安別の砂濱に立つたのであつた。

川中島
長野縣善光寺平
にあり。

信玄

武田信玄。戰國時代の武將。天正元年歿。年五十三(二一八一—二二三三)

安別

樺太西海岸にある港。日露の國境に位す。

荒涼
あれはててさびしきさま。

バラック
假小屋、掘立小屋。
犢
コウシ。

上つて見ると、沖から見た通りの、それは荒涼たる寒村であつた。

先づ目についたのは、罐詰工場らしい、殆ど吹曝しのバラックであつた。大きい犢ほどの樺色の樺太犬が、そのりとその門前に出てゐた。ざくりくと薄墨色の砂を踏むと、昆布や赤い大きな蟹の殻や、流木の碎片や、何かの脊椎骨などが雨にじつとりと濡れて、北海の漁村らしい臭氣が鼻を突いて來た。



樺太日露兩國境標

たうとう國境まで來たのかと思ふと、私はひえ〜とし
た雨の湿りに顛へたが、また子供のやうに其處らを駈廻り
たくもなつた。

車前草

オホバコ。車前
草科に屬する多
年生草本。

「や、車前草だ。素敵々々。」

それは樺太車前草とでも云ふのだらう、すばらしく大き
な葉だ。それが實に柔かな緑を輝かしてゐる。砂濱から
一段上ると、その車前草に縁取られた徑が續く。大勢通つ
たためか、ひどい泥濘になつてゐるので、私は草の上を歩い
た。

泥濘

ディネイ。

「や、驚いた。馬鈴薯の花だな。」

内地では五六月ごろの薄紫の馬鈴薯の花だ。 蕪の黄色

蕪

シシ。

い新鮮な花だ。

「や、菜の花だな。これは驚いた。」

とある漁師の家の窓からは、女の子がたつた一人顔を出
してゐた。その前の畑には、雨に濡れた黄色の菜の花が咲
き群れてゐた。それに豌豆の花。背の低い唐黍。葱坊主。
私はまた、びしやく〜と緑草の上を歩いて行つた。
雨が次第にあがりかけて來た。が、まだ横なぐりに吹き
つけることがある。

唐黍

タウキビ。玉蜀
黍のこと。禾本
科に屬する一年
生草本。

砂濱には、細い丸太の長方形の高い柵が、その雨と風との
中に寂しく侘しく續いてゐた。網小屋のやうなものも目
についた。私は道づれの巡查さんに尋ねて見た。

侘し

ワビシ。

「これは何ですか。」

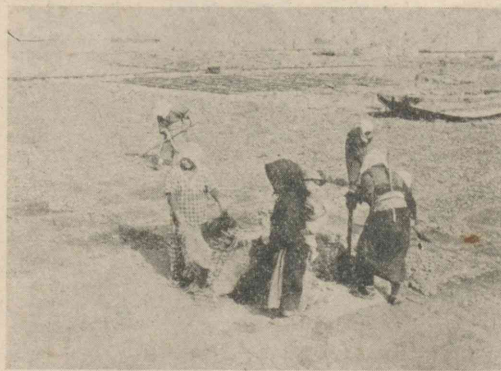
「鯨の乾場であります。これは廊下と申しまして、こゝへ鯨を乾すのであります。」

「この小屋は？」

「これは納壺なづかであります。網や雑具を入れるのであります。」

その外に大きな釜が二つづつぐらゐ据ゑつばなしになつてゐて、どれも激しい鯨の臭氣に充ちてゐた。

釜の中のは鯨粕であらう。粕の上には雨が降り溜り、脂がざら／＼と浮いてゐた。季節はづれだし、無論そこらには



鯨 粕 の 乾 燥

納壺
納屋に同じ。
置小屋。
物

据ゑる

鯨らしいものは影も見えないで、たま／＼昆布などがひらひらとしてゐるだけであつた。

と、鴉が飛んだ。大きな黒い鴉だ。

大きい納壺の一つは、戸が開けつばなしになつてゐて、すばらしい黒熊の毛皮が、その形なりにぶら下つてゐた。その黒に黄の交つた粗々しい毛竝には雨霧が降りかゝり、内側の白い皮までがすべ／＼と冷えきつてゐて、何となく無氣味であつた。その納壺の奥には網が積まれ、土間には赤ん坊を背負つた髪の赤い目の大きな女の子が、たゞむつつりとして時化波の荒海を眺めてゐた。一行の二三は、その中へづか／＼とはひつて行つた。吊された熊の毛皮が、

時化波

るくると顎のあたりから廻り始めたのも薄氣味が悪かつた。

駐在所があり、郵便局があつた。間を隔ててぼつりくと。それはバラック式のはかないものであつた。以前に國境守護の駐屯兵が住むために急造したといふ小舎のままであるらしかつた。東洋風の簡素なものだ。

だが、何といふ巨大な虎杖であつたらう。それらの小舎のうしろの丘の崖から下の裾まで叢生した虎杖の、早くも蟲がついて黄ばみかけた葉の間には、今まさに淺黄緑の花が咲き盛つてゐた。それに丈の高い女郎花に似た黄色い草花の目ざましさはどうだらう。私はまた立停つて、これ

虎杖
イタドリ。蓼科
に屬する多年生
草本。

景趣

等の初めてみる樺太の景趣に目を圓くした。

それはそれは燃立つやうな赤い細かい實の、つやくくと群がつてゐる、名も知らぬ木の藪があつた。

「あれは何の實だ。」

「ななかまど。」と、一人の男の子が私の間に答へた。

風と雨とが、また激しく音を立て初めた。

「おゝい、おゝい。」

前から後から、わが一行の數々が、その風と雨と、しぶいて飛んでゆく霧の中とから呼び應へる。

かうして、私たちは國境の天測點へと、草ばかりの一つの丘の頂邊を目ざして、泥濘のひどい小徑をうねりくして



ななかまど
七輪、薔薇科に
屬する落葉喬
木。

しぶく

天測點

落
フキ。菊科に屬
する多年生草
本。

登りかゝつたのである。

既に天測點を見極めて續々とおりて来る誰彼は、頭の上
に驚くほど大きな落の葉を傘代りにかざしてゐた。

「ほう、それが樺太落ですか。」

「え、大きいでせう。」

「何處に生えてゐます。」

「そこら一面です。」

「ほう」と、また驚きながら、私は登つた。靴に卷ゲートルの
扮装だが、新しく普請した路がまだ柔かな上に、大勢で雨の
中を踏蹂つたから、靴も何も泥まみれだ。それに足がかり
も悪く、坂は急になるので、亡ること夥しい。私はたうとう

ゲートル
脚絆。

扮装

イデタチ。

普請

フシン。

のめる

柄

ガラ。

華奢

のめりさうになつて、強く突きたてた蝙蝠傘に、思はず全身
の重みを託したので、それが弓のやうに撓むと、その柄から
ぼきりと折れてしまつた。柄にも無い華奢なステッキ用
蝙蝠傘などを買つて來たのが、そもぐの過であつた。私
は苦笑して、その柄と傘の尖とを両手に持つた。

そこらは虎杖の花盛りであつた。樺太虎杖の花は、内地
で見るやうなほのぐとした淡紅色を含んではゐないが、
その緑がかつた薄黄な花は、却つて虔ましくてあはれであ
つた。それが雨と霧とに濡れしづくになつてゐた。

太い丸太の無雜作な柵に圍まれて二坪ばかりの場處が
あつた。その柵は朽ちかけて、既に丸太の外皮のところど

虔まし
ツツまし。

ころはぼろくに頽れてゐた。その中に日本と露西亞との境界標石が嚴然と立つてゐた。正方形の臺座に据ゑられた鼠色のその標石は、高さは二尺にも満たないであらう。北面に鷲、南面に菊の御紋章が浮彫りにしてあつた。私は露西亞領の虎杖の叢にもはひつて見た。

北を眺めると、その海岸線は南と同じやうに、さして高からぬ丘陵が続いて、立枯のとど松の疎林が、しきりなく流れる雨雲の下に、ぼうくと打煙つて見えた。寂とした國境であつた。

(北原白秋「フレップ・トリップ」)

とど松
松杉科に屬する
落葉喬木。

北原白秋
本名隆吉。詩人、
歌人。福岡縣の
人。明治十八年
生。

一六 林より街より

一 白樺と落葉松の林

たうとうこんなところまで来てしまひました。 わかたない 稚内港

をはなれて船に乗りました晩は、雨で、いかにも北の果らしう御座いました。が、却つてこちらに渡つて見ますと、なかくととのつてをりまして、寂しい氣分も御座いませず、氣持のいゝ涼しさで御座います。 到るところ、白樺と落葉松の林で御座いますが、近



九條 武子

稚内
北海道北部の
町。ノシャップ
岬の東岸に位
す。宗谷海峡に
臨み、樺太との
連絡點なり。

年、毛蟲の爲に枯らされて、見るから惜しいやうに思はれま
す。

みやまりんだうの美しいさえた紫の花は、御目にかけた
いやう。クリープの可愛い實も、まつ赤に美しい色をして
をります。たゞ、あまりに夜が静かなので、窓を明けて見ま
したら、不思議に、蟲の聲が少しも致しません。秋らしい氣
分なのに、なにやら物たりませぬ。

明日は、十九里の山道を、西海岸の眞岡へ出ます豫定で御
座います。寒帯の森林のながめを楽しんでをります。

東京は、さだめてまだ残暑が厳しう御座いませう。
はるかに御機嫌をうかゞひます。

クリープ
こけももの方
言。

眞岡
樺太西海岸の港
市。

八月二十七日夕

樺太豊原町にて

二 今の身にとりて

唯今はわざくの御使にて、うつくしき御羽織いたゞき、
今の身にとりて、何よりの御心いれの御品と、いつまでも、厚
き御心を嬉しういたゞき候。いづれ御めもじにて、萬々御
禮申上げたう候へども、とりあへず御うけまで。かしこ

十月二十七日夕

三 自ら畫き彫り候もの

御すこやかに渡らせられ、めでたく存じ上候。恐ろしき
おもひでの一めぐりと相成候。其の折には、いちはやく御
同情のたまもの、かゞいたゞき、御まごころのかたじけ

恐ろしきおもひ
で云々
大正十二年九月
一日の大震災の
思出をさす。
いちはやく

今の身にとりて
云々
大正十二年十月
の執筆に係る。
めもじ
會ふことの敬
語。女子文に用
ふ。

九月一日
大正十三年九月
の文。
三河島
今東京市荒川区
にあり。



手づねくね 九條武子作

なさ、言の葉に盡しがたう存じをり候。
此の品まことに御はづかしき出来に
は候へども、せめて御禮心に、千々の一
つにもと、みづから畫き彫り候ものに
候。御をさめたまはりたく進じあげ
候。

九月一日

かしこ

四 三河島千軒長屋より

この間は御目にかゝれまして、嬉しう御座いました。御
人数は少くても、ほんたうに心持のいゝお集りほど嬉しい
ものは御座いません。私は旅にばかり出まして、何の準備

の御手傳もいたさず、さだめていろく御配慮いたさきま
したことと存じます。

今日から、三河島千軒長屋と申すところに御座います本
願寺の會館を借りまして、仕事をはじめました。府下でも
わけて悲惨な人達の住んでをられるところで御座います。
窓のすぐ近くには、火葬の煙が盛んに上つて居りますとこ
ろで、貧しさと病とに苦しむ人達の話聞きますと、胸が一
ぱいになつてまゐります。でも、かうして皆様に力づけて
いたゞきまして、働かせていたゞくことは、私としてほんた
うになさなければすまないことと、つくづく感じられます。
午後からはじめまして、もう五百人ほど見えたやうで御座

仕事
病に苦しめる貧
民を治療する診
療所の仕事。

博士
治療に従事する
醫學博士。
大車輪

います。博士たちは、お茶一杯召しあがるひまもなく、次から次へと大車輪の御働、そばで拜見してゐても、涙ぐましいやうで御座います。

二十日にもしお天氣で御座いましたら、御都合遊ばして一度御出かけを願ひ上げます。二時半に、上野驛で御目にかゝることにいたしませう。一寸でも御風邪氣かおのどもお悪う御座いましたら、御無理遊ばしませぬやうに。かなりごみく／＼して居りますから。どうぞ御身御大切に。

十二月十七日

三河島千軒長屋仁風會館にて

九條武子

歌人。京都市の
人。昭和三年歿。
年四十二。

(九條武子—九條武子夫人書簡集)

大死底の人云々
すべての妄念を
断ちて、大悟を
得たる者が、再
びこの世に出で
て活動する時、
如何に活動する
かの意。
碧巖錄
禪宗の聖典。十
卷。宋の佛果圓
悟禪師が雪竇禪
師の頌古集を評
したるものを、
門人の編せし
書。

一七 黙って働く修養

「大死底の人却つて活くる時如何」といふ句が碧巖錄といふ書にあるが、一度死んでまた生返つた人は、非常に強いものである。謠や淨瑠璃などを習ふ人も、一度聲がすつかり潰れて、それからまたよい聲が出ると、今度はどんな事があるつても決して潰れぬ。人生の事もまたその通りである。小さい智慧や才覺を振廻して、上手に世の中を渡らうといふ考では、結局ろくな者にはなれぬ。智慧も才覺もすつかり捨て、ばかになつてこつ／＼と働いてゐる間に、大いに發展すべき力が養はれるものである。死んでまた生返つて

來るといふ覺悟が最も大切である。

眼の前の事ばかり見てはならぬ。先の先まで見通す力がなければ、意義ある一生は送れぬ。損をするのが結局得を取る途だといふ事を、世の中へ第一步を踏出した時に考へなければならぬ。「大巧は拙なるが如し」と老子は言つたが、當世は小巧を競ふ人が多い。誠に心細い次第である。

例 ロンドンの或大きなデパートメントストアで小店員を募集した事がある。三人の少年がそろつて支配人に面會を求めたが、その一人は販賣部、他の一人は仕入部に入りたいと、それ／＼の希望を述べた。今一人は中でも敏捷らしく見える少年であつたが、支配人がその希望を尋ねると、エ

老子

周代の人。姓は李、名は耳、字は伯陽、諡を聃といふ。道學の祖。老子二卷の著あり。

デパートメントストア
百貨店。

敏捷
エレベーター
ボーイ

拔擢する

レベーターボーイに採用して戴きたい」と言つた。支配人は不思議に思つたが、彼の希望のまゝに、エレベーターボーイに使ふ事にした。他の二少年がその手腕を早く支配人に認められて、早く拔擢されたいと思つて頻りに競争してゐる間に、彼は毎日黙々として、エレベーターを動かしてゐた。彼は至つて勤勉で、凡そ三箇年の間一日も休まなかつた。彼は誰に對しても餘り物を言はず、唯その職務に忠實であつた。いかに忙しい日でも、彼は少しも不平らしい様子を見せず、何時も黙つて微笑してゐた。

他の二少年は次第に給料も上つたが、彼は依然としてエレベーターボーイであつたから、給料も入つた時のまゝで

あつた。「何か希望はないか。」とをり／＼支配人が尋ねても、「いえ、これで結構です。」と、何時も同じ答であつた。「あいつはばかだ。」と他の店員等ほうはさをしてゐたが、流石に支配人は、「いや、ばかではない。彼は見こみのある少年だ。」と考へながら、口に出しては何も言はず、彼の舉動を注意してゐた。

何時か三箇年は過ぎた。或日、支配人は彼を一室に呼入れた。「君は來てからもう三年になるが、君の研究は纏つたか。」「いえ別に研究といふ事も……。」「さう謙遜しないでもいゝ。君はエレベーターボーイで終る人でないといふ事は最初から知つてゐた。何か研究してゐたのだらう。もううち明けてもいゝ時ではないか。」と熱心に問はれて、彼は

謙遜

始めてその本心をうち明けた。

三箇年間黙々としてエレベーターを動かしてゐながら、密かに彼はこのデパートメントストアに來る客の、年頃から、その様子から、その買物の仕方等に就いて、最も精密な觀察をして、種々分類をなし、種々の表を作つてゐたのである。彼が支配人の前に列べて見せたその研究の結果の、緻密で正確な事は、支配人を驚かした。「君は實に偉い男だ。君の様な店員を得たのはこの店の仕合せだ。どうぞこれから僕の片腕となつて働いてくれ給へ。」と支配人は言つた。「實に君は偉い男だ。よくも三年の間、ばかになつてをられたものだなあ。」と支配人が重ねて言つた時に、少年はポケット

分類

緻密
チミツ。

プロククター
イギリスの女流
詩人。(一八二
五—一八六四)

から一枚の紙片を取出して、「私は時々これを讀んでゐたの
です。」と答へた。それはプロククター女史の作の短い詩であ
つた。その詩の意味は――

大きな松の木の下に咲いてゐた紅い草花が、夕風に吹
かれて散らうとしてゐる。「私は何時でもこの通り緑
でゐるのだが、かはいさうに君はもう散るのか。」と松が
聲をかけると、草花は優しい聲で答へた、「私は種となつ
て地の下に眠つてゐませう。さうして來年の春にな
つてまた咲きませう。その時よく御覽なさい、今より
もつと美しい花がもつと多く咲いてゐませうから。」

(小林一郎)

小林一郎
文學者。中央大
學教授。東京大
生。の。人。明
治九年

一八 土 にな る

京都の或友人から聞いた、秋田の山の中の百姓爺さんの
話である。其の友人が爺さんに向つて、「爺さん、お前死んだ
ら何になる。」と聞いた。「死んだら土になるだ。」爺さんはか
う答へた。爺さんの答は、きつぱりとしてゐた。「當り前だ
よ、分つて居るではないか。」といふやうな調子を帯びてゐた。
友人は之に對して何とも言ふことが出来なかつた。「あのお
爺さんには、いつも參らせられるのです。」と友人は私に言
つた。

此の爺さんの言葉が、私には味はひ深く聞かれる。「死ん

だら土になるだ。此の素朴な力強い一語に、爺さんの信念と希望と安心とが鳴り響いて居るやうに聞かれる。爺さんは此の一語より以上には何も言ひ得ないであらう。けれども、爺さんの此の一語には、言ひ盡せぬ程の深い意味がある。と私は感じて居る。「死んだら土になるだ。」此の一語に、爺さんは胸一杯腹一杯の喜びを籠めて居るやうに私には感じられる。爺さんは小さい時から百姓をして、土に親しんで来たのである。四十年も、五十年も毎日毎日土に親しみ土に接觸して来た。爺さんに取つて、土は死物でない、無機物でない。爺さんの眼には、土は生きて見える。爺さんの爲には、土は長い間友達であり、兄弟であり、親である。

無機物
生活機能を持たざるもの。金・銀・土・水・空氣等。

跣足

ハダシ。

蹠
アシノウラ。

否、否、土は爺さんの爲には神である、土といふ神である。爺さんは朝早く起きて、跣足で地の上に立つ。土が蹠に触れる。ぢり／＼と土の氣が蹠から爺さんの血管に傳はつて行く。爺さんの身體が温くなる。爺さんの腹が満ち、胸が開け、頭が爽かになり、爺さんの顔が輝いて來、爺さんの力が唸つて來る。爺さんは鍬を持つて、畑の土の中に足を入れる。土は爺さんの鍬に随つて、爺さんの心の儘に動く、轉がる、覆る。爺さんの胸には感謝の念が湧いて來る。ああ有難いことだ、かうして芋種を植ゑ、大根の種を蒔いて置くと、雨が降つては土を潤ほしてくれる、日光が照つてはぬくもりを與へてくれる。そして、芋の子が繁殖するのだ、大

下肥
シモゴエ。

根が大きくなるのだ。かうして、麥も出来るのだ。俺がかうして、土の中に立つて、鋤を執つて耕してやり、下肥をかけてやると、土が喜んでそれを吸収つてくれて、そして、芋や、大根や、米や、麥を育ててくれるのだ。俺達は其の芋や、大根や、麥を食べて、かうして生きて居ることが出来るのだ。あゝ人間は、みんな土のお蔭で生きて居るのだ。土がなかつたら、俺達人間は死んでしまはなければならぬのだ。それは天道様がなければ、雨も降らないし、日も照らないし、土だつてどうにもすることは出来ないのだけれど、天道様の下では、土が何でも育て上げてくれるのだ。

さうだ、林檎が見事に實つた。あのぼうつと夜明方の空

天道様
テンタウサマ。

助勢
ジョセイ。

の色のやうな、あの赤い黄いろい色。なんといふ美しい色であらう。そして、あの甘いやうな酸っぱいやうな味。人間の手にあんな結構な味が出来ると思ふか。都の人がどんなに骨を折り工面をして、うまい菓子や料理を拵へるか、らと云つて、あの林檎の味にまさるものを拵へる事が出来るものか。日本一、いや、いや、世界一の料理の名人だつて、林檎の味ほどのものを拵へることが出来るものか。それはみんな土が拵へてくれるのだ、みんな土が育て上げてくれるのだ、俺は一生土の相手になつて、土の仕事を手傳つて来たのだ。其の報酬に、土が俺に此のうまい物を食はしてくれるのだ。俺は山の中の貧乏者でも、土のお蔭で、土の助勢

をしたお蔭で、都の金持と同じやうに、此のうまいものを口にすることが出来るのだ。これも土のお蔭でこのやうなうまいものを口にすることが出来るのだ。

爺さんは鍬の手を止めて、腰を伸ばしながらあたりを見廻すと、朝の露に濕つた土が朝日の光を受けて、きら／＼と輝いて居るのが見える。爺さんの胸には、益、感謝と報恩の念が涌く。爺さんは天地の恩恵の輝のなかに立つて居るのだ。此の一生を、鍬を執つて土のなかに立つて過して来た。

長い事であつた。俺ももう頓て死ぬのだ。死んだら何になる。土になるのだ。大根や、芋や、米や、麥や、林檎を育て

五穀
米・麥・粟・黍・豆
糧
カテ。

るのだ。そして、孫子や世間の人達を養ふのだ。此の鍬くちやに干からびた俺の五體が、死ねばあの土になつて、五穀・蔬菜を育て上げるのだ。そして、人の命の糧を拵へてやるのだ。土になれたら、孫子も養へる、天道様に御恩返しも出来るのだ。死んだら何になる。知れて居るではないか。あの土になるのだよ、あの有難い土様、土といふ神様になるのだよ。

(三浦修吾―林檎の味)

三浦修吾
教育家。成蹊學
園講師。福岡縣
の人。大正九年
歿。年四十五。

一九 この一躍

脂が乗る

あとに残つた第五回目。今度こそ跳ばねば、又今日もあのスタンドの優勝マストに英國の國旗を翻されるのだ。第六回目もあるが、それには殆ど力が盡きて十分に脂が乗



人見絹枝

らないのが常例だ。

この五回目。私は案ぜずにはゐられなかつた。更に二回の歩測をやり直した後、私はその當日、私の持つすべての力を集中して一躍を試みたのであつた。併しその五回目の成

慘酷
ザンコク。

纜かに
ワヅかに。

績は甚だ悲惨な結果を來した。みじめとか慘酷とか、言うても言ひたらぬものであつた。

踏切脚は更に合はない。しかもその時には左脚が踏切板に纜かに懸つたばかりであつた。身體に十分ばねのつかぬ上に、私は心にあせりを覺えた爲、空中で行ふべき挟み跳に無理が出來て、平常の通り著陸前、脚を前方に延ばすと同時に、兩手を上方に引上げようとしたその時、やすりのかかつた鋭い靴のスパイクで、自分の右手の掌を六箇所も深く引裂いてしまつた。

審判員

記録は五米三一。私は何といふ立場に置かれたのであらうか。審判員の持つ卷尺のメートルの度盛をちつと見

どよめき

ファイナル
決勝。競技に用
ふる言葉。
観衆

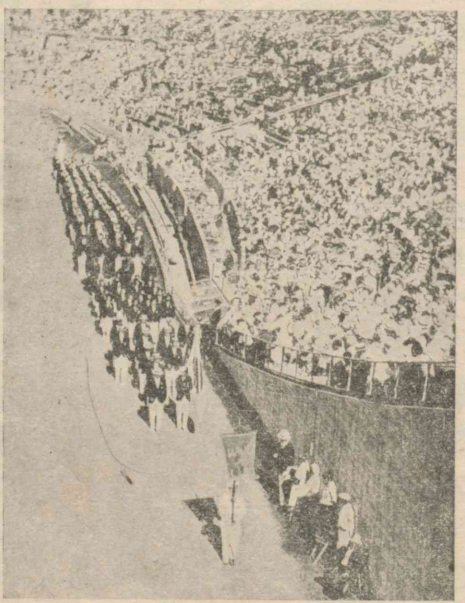
つめた時、私には殆ど希望も力も無くなつた。
脱ぎすてたオーバー・スエーターを著た下に、傷ついた手を隠しながら、黒田マネージャーの傍に戻つて來た。
瑞典のプラチーノ選手は、見事五米一六のレコードを示す。しかし七萬近い観衆は、一寸拍手を送つた許りで、又直ぐ元の静けさに歸つてしまつた。何のどよめきも無く、場内の空氣はいやな程落著いてゐる。今にも一大變事でも起るかの感を持たせる。

槍投もファイナルに進んでゐる。鐵彈投のファイナルはもはや終つたらしい。観衆七萬の人達は、槍投の結果にも、鐵彈投の勝負にも目もくれず、たゞあと一回残されたが

ン選手と私との決戦を待つてゐる。英國勝つか……又日本この私が勝を取るか……鳴りを沈めてその結果を待つてゐるのであつた。

浮んで
浮びて

ガン嬢の面には軽い喜の色が浮んで見える。「人見さん。しつかりやれ。あともう一回あるからな。」といつて下さる黒田マネージャーの顔。



式場退クツピンリオ

痙攣
ケイレン。筋肉
のひきつること。

それはもう常人とは思はれぬ程青くなつて、その唇はしきりに痙攣してゐる。私の心は此の時どうであつたらう。

みすく

ゴッド・セーブ・
ゼーキング
英國の國歌。

繰言
クリゴト。

あとに残つたのは本當に一回きり。この一躍で、私は今日の試合を閉ぢねばならぬのだ。どの様なことがあつても、この一躍に成功しなければならぬ。さもなければ、みすみす英國の國旗が、又今日もあの最高の旗竿の上につるされて、ゴッド・セーブ・ゼーキングの歌を聞かされるのだ。昨日から見飽きる迄、英・佛國旗は揚つてゐる。どうか今日たつた一度……一度だけでよい、それだけ叶へて貰ふことは出来ないであらうかと、繰言をする外はなかつた。

若し自分を救ふ神様があるならば、私の右脚についてこの一躍を助けて下さい。あゝ、今日こそ日章旗を揚げたいものだ……。若しこの不成績を故國にゐる父母等が見た

氏神

走巾
走巾跳のこと。

ならばどんなに悲しむであらう。此の間も郷里の方からの手紙に、「お前が家を出てからといふものは、母と姉はお前の勝利を一日に二度、氏神様に詣つて祈つてゐる。國の爲だからしつかりやつてくれ」といふ意味のものが、二通迄も届いてゐるのである。

「走巾できつと勝て」といつて下さつた方々にも、世間の人等にも、どの様に言つて詫びられよう。御詫ごんげんだけでは濟まない。あゝ、最後だけを……。

私のこの苦しい氣持を七萬の觀衆や、百六十名近い各國の選手へは勿論、唯一人の黒田マネージャーにさへも話すことが出来ず、一人で苦しんで居つた。その瞬間、泣くにも

泣かれなかつたのであつた。

あゝ最後だ。跳べるだけ跳んで見よう。

覺悟はして立つたが、併し私には自信も希望も凡て絶たれてしまつたあとであつた。かうして最後に助走路のスタートに立つた時、私は急に思ひ出した。

七月八日午後八時、下關行の特別急行で、この征途の門出にのぼつたあの時、大阪驛で漸く暮れたばかりのホームのベルのけたゝましい音を後にして、汽車が動き出さうとした時、木下博士が人見さん、もうそんな寂しい顔はよしてくれ。先生だつて一人で年若い娘を旅立たせるには心配だ。併し君も二十歳だ。この大任を果して歸る日がきつとあ

七月八日
大正十五年
征途の門出

木下博士
木下東作 醫學
博士 當時日本
女子スポーツ聯
盟會會長

餞別
センベツ

ることと思ふ。僕は貴女に何か餞別をやりたいが、何も別にこれといつて與へるものはない。唯この作つて上げたユニホームとパンツ、是は先生だと思つて向うに行つて身につけて競技場で奮闘してくれ。貴女の苦しむ時はきつと先生も案じてゐると思へ。それから今一つある。それは向うに行けば、一人の日本人である黒田氏にも話すことが出來ず、外に誰にも知らせられぬ泣くに泣かれぬ時もあるだらう。併し、その時は貴女は目を閉ぢて、日本の神様を拜め……きつと貴女は救はれる。……なあ！きつとさうするのだよ。元氣で行つて來い。『かういつてくださつた慈父にも勝るその御心を思ひ浮べて、私は靜かに目を閉ぢ

慈父

絶える

て、どうか一度です。跳ばして下さい。」と夢中に祈った時、今迄耐へて居つた涙が急に兩頬を傳はるのでした。拭いても拭いても涙は絶えない。側にあるガン選手に對して恥づかしいほど涙が出る。

助走の三十米餘の地面がぼんやりかすむ。

夢中で走り出したその最後の一躍……今迄合はなかつたその脚も、八寸の踏切板に一分一厘の違ひなく、右足が強くあたつた。占めた……跳べた。始めて跳べた。記録五米五〇……私は直ぐに大聲を出して喜びたかつた。併しよく考へれば、私の後にはまだガン嬢の一躍がある。ガン嬢を見た時、同嬢はしきりに深呼吸をしてゐる。そ

ファウル
違法と譯す。競
技に用ふる言
葉。



躍

して終に走り出したその時、私はその助走の有様を何も見ない。たゞ八寸の踏切板を見つめた……。今も私の眼に明かに残るそのガン選手の左脚。踏切板の前五分ばかり

ファウルになつた。

あゝ……初めてガン選手に打勝つことが出来たのだ。アナウンサーの聲もほがらかに決勝の報告がされた。その聲の終るか終らぬ中に、今迄静まり返つてゐたスタンドの観衆は、一齊に總立ちになつて、そのスタンドを靴でたゞく音破れる様な拍手、暫

ハロー
おい。呼びか
けの言葉。
吹奏裡に
スキソウリに。
掲揚
ケイヤウ。

人見絹枝
元大阪毎日新聞
記者。岡山縣の
人。昭和六年歿。
年二十五。

くは止まなかつた。「ハロー、人見、人見」の聲を浴びせられながら、高高と日章旗はスタンドの中空高く、君が代の吹奏裡に掲揚された。

これを見た黒田マネージャーと私とは、今迄の苦みも急に嬉しさに變り、フイールドの中で泣けるだけ泣いた。多くの白人の中にたつた二人の日本人が、日章旗の下で泣いたその涙は、ほんとに美しいものに違ひなかつた。この時こそ始めて自分は日本の天皇陛下の赤子の一人に成り得たものと思つた。

（人見絹枝「スバイクの跡」）

お年寄
町役人の上席
者。
町役
町役人の略。名
主。五人組等を
いふ。

下戸
退屈さう

二〇 壺と提灯

（道々話）

さるお町内に婚禮振舞がござりました。お年寄をはじめ、町役家持の人々、一同が座に著きますると、さまざまの馳走がある。

時にかの年寄は、酒と聞いては笹の露にも酔ふほどの下戸ぢや。座中を廻る盃の間、退屈さうにしてゐられると、亭主方が氣の毒に思ひ、「お年寄様は御酒は召しあがらず、御退屈にござりませう。ちとお菓子なりともお取り下されい。」と、南京の古染（古染）附（附）の壺に大輪の金米糖を入れて、年寄の前へ持つてくる。座中も、これはよいお心づき、ひらにお菓子を

わるう。
わるく。

きしむ

無理無體
景清と美保の谷
悪七兵衛景清。
美保の谷十郎。
鍛
シコロ。兜の後
に垂れて、頸を
被ふもの。

召しあがれい。」と、勸むるに、年寄もわるうはなし、「しからば頂戴を致しませう。」と、壺を引きあげ、手首を突つこみしなに、少しきしむやうに覺えたが、無理に手をさし入れて撮み出さうとするに、手首がつまつて抜けませぬ。どうぞして抜けるかと、色々にこじ廻して見ても、引つばつて見ても抜けず、まご／＼して居らるゝと、側から見つけて、「どうなされましたぞ。」いや、手が少し詰りまして思ふやうに抜けませぬ。」と、眞顔になつていはるる。「それは氣の毒。私が壺を持つて居りませう。無理無體むちちに手をお引きなされ。」と、一人が向うへまはつて壺をつかまへ、あとへ引くと、年寄は手を前へ引く。互にえいやと引合ふ有様、景清と美保の谷が鍛曳をす

司馬溫公

名は光。字は君實。溫公は諡。宋の名相。(西曆一〇一九—一〇八六)



これから大騒ぎになり、醫者どのを呼んで來い。骨接ではゆくまいか。」と、酒宴の興も醒め果てました。時に五人組が一人進み出で、いづれもお騒ぎなさる

な。我等承はつたことがある。昔、司馬溫公といふ人、幼いとき大勢の小兒と共に、大いなる壺のほとりに遊びました。一人の小兒、誤つてかの壺の中へはまりました。大勢の

難澁
ナンジフ。
よ。う。
よく。

しかつべらしく
煙管
キセル

抜けぬこそ道理
なれ。

子供は、これを見て逃げ歸つたが、司馬温公一人は歸らず、側なる手ごろの石を取つて、かの壺へ投附けましたれば、壺は割れて、はまつた小兒は不思議に命を助かりましたと、或人の話ぢや。今お年寄の御難澁は、この話によつて似てある。いざや、われらが司馬温公となつて、たとへばその古染附の壺が、失禮ながら何程高金の品でも、お年寄の腕には換へられぬ。」と、しかつべらしく煙管をひつさげ、向うへまはれば、年寄は氣の毒さうに、壺をかぶつた手を突き出すと、ただ一打に打碎いた。何がさて、座中は金米糖が散らかつて雪を降らしたやうになると、「やれ、お年寄、お助かりなされたか。」と、その手を見れば、抜けぬこそ道理なれ、金米糖を一杯攫んでゐ

片意地

しまうて
しまひて

られたと申すことぢや。なんと可笑しい話ではござりませぬか。攫んだ物を放しさへすれば、自由自在に手は抜け、たものを、一度攫んだら首がちぎれても放すまいと、片意地な生れつき、それで自由自在の大安樂が出来ぬのぢや。かく申せば、錢金の事のやうなれど、攫むものは、こればかりではない。器量のよいを攫み、賢いを攫み、負惜みを攫み、家柄を攫み、身代のよいを攫んで、放すまいとかつぎ歩くによつて、教へを聞くこともならず、樂をすることもならず、慎みも出来ず、せん方なさに顔しかめたり、酒飲んで紛らしたり、さりとは氣の毒なものでござります。壺割つてしまつてからは、何いうても詮ないことぢや。身代の壺を割らぬさ

き、御用心が第一でござります。

それでもわが本心は明かな、明德は曇つてはない、洗濯するには及ばぬと思ふ人があるものぢや。これを諭へて申しまするに、私のやうな盲が一人旅をして、心安い旅籠屋にとまり、あすの朝は七つ立をさして下され」と頼む。亭主も心得、朝早う立たせまする時、盲は旅の支度をと、のへ杖を持つて出ようとすると、亭主がいふには、「まだ夜深いに提灯をお持ちなされ。お貸し申しませう。」何をいはしやるやら。盲が提灯を持つて何にするもので、「いえ、お前にはいりますまいけれど、暗がりをとぼく、お出でなさると、往來の人がゆき當ります。それで提灯をお持ちなさ

旅籠屋
ハタゴヤ

七つ立

早う。
早く。

さうぢや

おのれ
古語。今の「おまへ」にあたる。

れと申すことぢや。」なる程さうぢや。私はゆき當らねども、えて目明がつき當る。さやうならお貸し下されい。」と提灯をさげて道五六町出ましたところが、向うから來る人が盲にはたとゆき當りました。そこで大きに腹を立てて、おれにつき當るやつは盲か。「向うの人も癩癩に障り、おれは盲ではない。さういふおのれがどう盲ぢや。」「いや、おれは盲ぢやけれども、人にはつき當らぬ。おのれが盲にきまつた。」向うの人も愈、腹立て、おれを盲といふ證據は、何ぞ覺えがあつていふのか。「お、覺えがある。おのれを盲といふ證據は、この持つてゐる提灯が、おのれが目にはかゝらぬぢやないか。」と、ずつとさし出す提灯の火は、宿屋の門口で

とうに
とくに

とうに消えてしまつてある。なんと氣の毒な盲ではござりまぬせか。火もともさぬ眞暗な提灯をさげて、これでも明かなと思つてゐるのは、本心見失うて、身勝手な心を本心ぢや本心ぢやと思ひ、洗濯せうとも慎まうとも思はぬ人によつたものでござります。どうぞお互に、火は消えてはゐないかと日々に吟味が致したいものでござります。

(柴田鳩翁 鳩翁道話)

柴田鳩翁

字は陽方、通稱謙藏。心學者。中年明を失ひ、諸國を遊歴して心學講話をなす。京都の人。天保十年歿。年五十七。(二四四三—二四九九)鳩翁道話三卷。鳩翁の心學に關する講話集。

落合直文

號は萩之家。國文學者。歌人。宮城縣の人。明治三十六年歿。年四十三。

二 緋緘の鎧

落合直文

緋緘の鎧を著けて太刀佩きて見ばやとぞおもふ山ざくら花

さわくと我が釣り上げし小鱸のしろきあぎとに秋の風吹く

山寺の石のきざはしおりくれば椿こぼれぬみぎにひだりに

父君よ今日はいかにと手をつきて問ふ子をみれば死なれざりけり

正岡子規

名は常規。俳人。歌人。愛媛縣の人。明治三十五年歿。年三十六。

正岡子規

(2) くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春の雨ふる

(5) 瓶にさす藤の花ぶさみじかければ疊のうへにとゞかざりけり

(4) わがやどの山吹ききて向つ家の一重ざくらは葉となりにけり

(3) 霜おほひのわらとりすつるしやくやくの芽のくれなゐに春の雨ふる

ゆともし火のひかりにてらすまどの外の牡丹にそゞぐ春の夜の雨

四季小品

一 初春の山

後山に上る。

春空靄として四山霞棚引き争はれぬ春となりぬ。

海はゆらくとして空と一つに融け練れるが如き水の面に、富士の白雪ちらく流れぬ。漁舟、鷗よりも小なり。

村々はまだ冬枯のまなれど、霞低う地に這ひ、春四方に満てり。鳶一羽悠々として山下に舞ふ。

山崖、畑の畔、到る處露の臺青く萌え、榛の木などはすでに垂々の花をつけ、春蘭も早きは花咲きぬ。枯草、枯葉の間よ

靄

低う。

低く。

露の臺

垂々

スギスギ。たれ

春蘭

シニンラン。

溪々

り春は簇々として萌えつゝあり。

二 花月の夜

戸をあくれば、十六日の月、櫻の梢にあり。空色淡くして碧霞み、白雲團々、月に近きは銀の如く光り、遠きは綿の如く和かなり。

微茫

春星影よりも微かに空を綴る。微茫たる月色、花に映じて、密なる枝は月を鎖してほの闇く、疎なる一枝は月にさし出でてほの白く、風情言ひ盡し難し。薄き影と、薄き光は、落花點々たる庭に落ちて、地を歩す、さながら天を歩むの感あり。

風情
フゼイ。

三 涼しき夕べ

戦ぐ
メヨグ。

日落ちぬ。石垣に腰かけ、足を垂れつゝ釣る。前に残照流るゝ川あり。後に青蘆さや〜と戦げり。



小川

潮次第に満ち、川逆さまに流れぬ。水澄みて水無きが如く、水底池よりも鮮かなり。小さき鰻は藻より藻にのたうち、今年生れのかいづは隊をなして水色の玉にも似たる水を遊げば、其の影ちら〜と底に印せり。石垣の穴より出で遊ぶだぼ鯨

だぼ鯨
鯨の類、沿海、潮線附近の岩礁間に棲息す。
宿かり
節足動物中、甲殻類に屬す。



は、蟹をあげて迫り来る辨慶蟹を避けて身をかはせば、小鰻は杭を抱きて這ひ登り、石垣に縋れる宿かりは、身を投ぐる

様にころくくと水底に墜ち行く。

銚々
サンサン。物の
細長き様。
魚苗
ギョベウ。魚の
子をいふ。

下流の方を望めば、下流却つて上流の如く、水は山影碧深く落つる邊より涼風と共に流れ来る。潮満ち盛れば、残照の影やゝもすれば押流されむとし、小鮮群がりて水を攪すれば、水の流れに其の紋を消し、銚々たる川底の藻は、水に梳られて、今にも流れ出でむとすれば、幾隊の魚苗もとゞまりかねて流れ行く。

鱒
鱒の幼きもの。

垂れたる足の爪先に水とゞく頃は、残照消え、潮も満ちて淀みぬ。鱒跳つてまた水に落つる音、石を投ぐる様なり。

四 暮 秋

柿の落葉を踏みて、後山に登る。

蕭々
セウセウ。風の
もの寂しく吹く
様。
龍膽
リンダウ。龍膽
科に屬する多年
生草本。



啞々
アア。

黄茅蕭々として亂れ、龍膽の碧棘の實の紅と徑を綴る。山上より見れば、田は盡く刈られ、麥の綠猶ほのかにして、村も瘖せ、晩秋の野いたく寂びぬ。烏五六羽あり、山上の樹より立ち、鳴き連れて彼方の村に向ふ。啞々の聲滿山に響く。

五 雪 の 日

起出で見れば、滿天滿地の雪。

午前は粉雪紛々霏々。午後は綿雪片々飄々、終日間斷なく降り暮らす。

障子を開けば、玉屑霏々亂れて斜に飛び、後山も雪の爲におぼろなり。風大いに到れば、積りし雪また亂れ立つて走

玉屑
ギョクセツ。ち
らちら降る雪の
形容。

る。

午後は愈降りしきりて、馬車も通はずなりぬ。積る雪の重みに、何の木にや、ぼきと折るゝ音するもの兩三度。

満天満地一白の中に、獨り前川のみ鼠色にして黒く、鷗十數羽來りて遊びつるあり。時々其の二三羽、水を起つて、十分に翼を擴げ、風雪に向ひて飛ばむとすれど、吹きやられ吹きやられて、空しく水に下りぬ。

盡日霏々濛々、天地雪に埋れ、人風雪に閉ぢられ、斯くて降りながら夜に入りぬ。

夜十時燈をとりて外を覗へば、飛雪猶紛々たり。

(徳富蘆花 自然と人生)

濛々
モウモウ。霧雪などの爲にうすぐらきさま。
徳富蘆花
名は健次郎。小説家。熊本縣の人。昭和二年歿。年六十。

二三 日 本

波間を分けて昇る旭日に、富士の高嶺は深紅に輝いてゐる。この朝、太平洋を越えて、故國に近づいて來た船には、その氣高い姿を仰ぐ感激の聲ばかりが満ちてゐる。

支那大陸から、濁りに濁つた黄海を航して歸り來る船も、對馬海峽に入るに及んで、はじめて洗はれた思を成す。碧玉を溶かしたかと疑はれる海水は、日光を受けて、波のしぶきさへ紫にうち煙る。島ある處、老松は岩に懸つて、この歸朝者を喜び迎へるやうである。

美しい日本。風光明媚なこの國に生れ出た我等の幸福

朝
アシタ。

黄海

朝鮮半島・濟州島・揚子江河口北端に圍まる、海面。

碧玉を溶かす

明媚

メイビ。山水の景色の美しきこと。

を想ふ。

瑞西
スイス。歐洲中
部にある共和
國。

富士山の如き美しい山は、世界に多く類は無い。瀬戸内海
の如き麗しい海は、他に多く比を見ない。しかし風景の
美しいだけが、日本の全部では無い。景色の佳い國ならば、
外にも無いとは云へない。高山と湖水とに恵まれ、世界の
公園と呼ばれてゐる瑞西の如き、その尤なるものであらう。
日本の尊い所以は、實にその國體にあり、その歴史にある。
上に萬世一系の天皇を戴き、萬民皆兄弟の如く一致協同
してゐるこの國體こそは、世界に比類が無いのである。古
來、我が國を覘つて、侵略して來る外敵もあつたが、未だ嘗て
一度も汚されたことの無い歴史が尊いのである。

覘ふ
ネラふ。

文化

祖國
祖先以來所屬せ
る國。本國。

かやうに萬國にすぐれた國體を戴き、かやうに世界に類
の無い歴史に育てられて來たのが、我等日本人である。我
等日本人は、祖先からこの國を受け傳へて來たのである。
平和なる外來者に對しては、何處までもこれを迎へて、そ
の文化や知識を吸收すべきは勿論であるが、兵力や思想で
我等を侵して來る者に對しては、協力してこれと戦ひこれ
を退けて、光輝ある我等の歴史を保つて行かなければなら
ない。我等はあらゆる意味で我等の祖國を守り傳へなけ
ればならない。
まづ身體や精神を一層健全にせよ。
女子の一生に取つて、今こそは、身體や精神を鍛鍊すべき

重要なる時代である。何者をも恐れず、よく正邪を區別し、光輝ある日本の歴史を傳へ行くべき基礎は、この時代に作られるのである。

萬朶
ベンダ。數多の
枝。
旗章
キンヤウ。旗じ
るし。

陽春四月、萬朶の花は到る處に咲き滿ちる。この花こそは我等が精神の旗章である。旭日に輝く日章旗、この旗こそは、我等の意氣の旗章である。

我等は日本人である。

漲る
ミナギル。
棲息
セイソク。

日本の國は美しい。しかしこの美しい國に居る間だけが日本人なのでは無い。場合によつては、この國を出て、海外に雄飛をする。黃塵天に漲る支那大陸も、毒蛇や猛獸の棲息する赤道直下も、我等が活動の舞臺として、絶好の樂土

である。而して世界の何處の果に行つても、我等は日本人なのである。光輝ある日本の歴史を、祖先から分けて貰つてゐる日本人なのである。

この歴史を汚さないやうな正しい日本人になるのが、我等の任務である。今の時期に於て、學業に勉勵し、心身の修養に努力して、日本の國民たるに恥ぢざる人とならねばならない。

自修文

一子 犬

嬉しいにつけ悲しいにつけて、憶ひ出すのはボチの事だ。

忘れもせぬ、祖母の亡くなつた翌々年の、春雨のしとくと降る、薄ら寒い或夜のことであつた。私は、例の通り宵の口から寝てしまつたが、ふと目をさますと、遠くでかすかにきやんくといふやうな聲がする。不思議に思つて、耳を澄ましてみると、次第に大きく高くなつて、つひには確かに門前に聞える。疑もなく、子犬の啼聲だ。時々咽喉でも締められる様に、けたましくきやんくと啼立てる。其の聲尻が、やがてかぼそく悲しげになつて、めいるや

宵の口

つひに

かぼそい

細い。

めいるやうに

欠伸
アクビ。

馴染

ナジミ。なれし
たしむこと。

いたしけ
痛はしむこと。

うに、遠い〜處へ消えて行く。と思へば、忽ち又近くで堪へきれぬやうに啼出して、く〜と鼻をならすやうな時もあり、ぎやおと欠伸をするやうな時もある。

私は元來動物好きで、わけても犬は大好きだから、近處の犬は犬抵馴染だ。けれども、こんなかぼそいいたいけな聲で啼くのは、一匹も無い筈だから、不思議に思つて、そつと夜著の中から首を出す

と、
「どうしたの。寝られないのかえ。」

と、母が寝返りを打つて、こちらを向いた。私は此の返答をさし措いて、

「あれは白ぢやないねえ、お母さん。もつと小さい犬の聲だねえ。どうしたんだらう。」

「棄犬さ。」

「棄犬つて、なあに。」

「棄犬つて……誰かが棄てていつたのさ。」

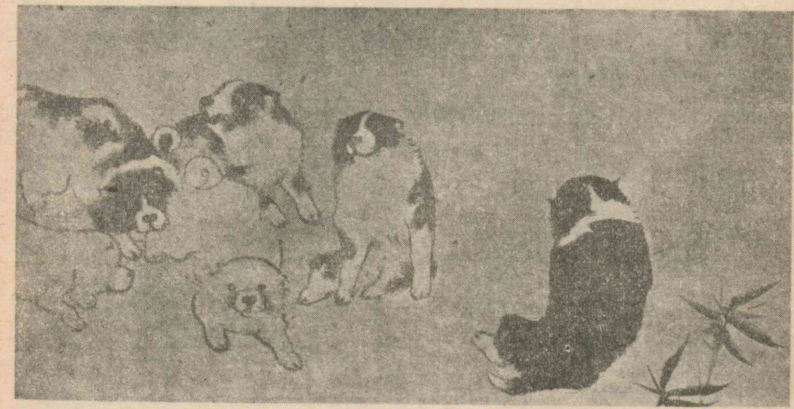
私はしばらく考へて、

「誰が棄てていつたんだらう。」

「おほかた何處かの……何處かの
人さ。」

何處かの人が犬を棄てていつた
と、私は二三度繰返して見たが、分ら
ない。

「どうして棄てていつたんだらう。」



筆雪蔵

ろこ犬

母は「うるさいよ。」ともいはないで、何處までも相手になり、その意
味を説明してくれて、

「もうおそいから黙つておやすみ。」
と、優しく言つて、彼方を向いてしまつた。

私も亦夜著を被つた。犬は門前を去つたのか啼聲が稍遠くな
る。寝られぬまゝに、私は夜著の中で、今聞いた母の説明を繰返し
繰返し味はつて見た。まづ何處かの飼犬が縁の下で兒を産んだ
とする。小さなむくくしたのが重なり合つて、首を擡げて、みい
みいと乳房を探してゐる處へ、親犬が餘處から歸つて來て、そのそ
ばへどさりと横になり、片端から抱へ込んで、べろ／＼舐めると、小
さいから舌の先でたわいもなくころ／＼と轉がされる。轉がさ
れては大騒ぎして起返り、又よち／＼と這ひよつて、ぼつちりと黒

擡ぐ
モタぐ。

たわいなく

鼻面
ハナツラ。

産毛
ウブゲ。

くむ
ふくむに同じ。

い鼻面で、お腹を探り廻り、漸く思ふ柔かな乳首を探り當てて、あわててちゆうと吸附いて、小さな兩手で揉立てく吸ひだすと、甘い温かな乳が、どくくと出て来て、咽喉へ流れ込み、胸を下つて何とも言へずおいしい。と、腋の下から、まだ乳首にありつかぬ兄弟が、鼻面で割込んで来る。とられまいとして、産毛の生えた腕を突張り、大騒ぎをやつてみるが、到頭とられてしまひ、又そこらを尋ねて、他の乳首に吸附く。其の中にお腹も一杯になり、親の肌で身體が温まつて、融けさうな好い心持になり、ついうとくとなると、くんだ乳首が脱けさうになる。夢心地にもあわてて、又吸附いて、しきり吸立てるが、直ぐに又たわいなくうとくとなつて、乳首がつひに口を脱ける。脱けても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなりで、一向正體がない。

窮屈

足搔
アガキ。

濡れしよぼたれ
濡れて筆のたるること。

其の時、忽ち暗闇からもじやくと毛の生えた、節くれ立つた大きな腕がぬつと出て、正體なく寝入つて居る所をむづと引つ撮み、宙に吊す。驚いて目をぱつちりあき、いたいけな聲で悲鳴をあげながら、四足を張つて藻搔く中に、頭から何かで包まれたやうで、眞暗になる。窮屈で息が詰りさうだから、出ようとするが、出られない。しばらく藻搔いて居る中に、ふと足搔が自由になる。と、襟元を撮まれて、高いく處からどさりと落された。うろくとしてそこらを見廻すけれど、何だか變な寂しい眞暗な處、誰も居ない。茫然としてゐると、雨に打たれて、見る間に濡れしよぼたれ、怖ろしく寒くなる。身慄ひ一つして、くんと親を呼んで見るが、何處からも出て來ない。途方に暮れて、よちくと這ひ出し、雨の夜半を唯ひとり、温かな親の乳房を慕つて、悲しげに啼き廻る聲が、先刻一

居たくまらない
ちつとしてゐら
れないこと。

絶入る
息が絶えるこ
と。

度門前へ来て、又何處へかさまよつていつたやうだつたが、それが何時か又戻つて来て、何處をどう潜り込モケんだのか、今は啼聲がまさしく玄關先に聞える。

「お母さん、お母さん、門の中へ這入つて来たやうだよ。」

と、私が何だか居たくまらないやうな氣になつて、又母に言掛けると、母は氣の無ささうな聲で、

「さうだね。」

「出て見ようか。」

「出て見ないでも好いよ。寒いぢやないかね。」

「だつて、あら、あんなに啼いてゐる。」

と、折から聞える絶入りさうな啼聲に、私は我知らずむつくり起きあがつたが、何だか一人では怖いやうな氣がして、

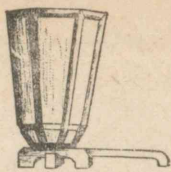
「よう、お母さん、行つて見よう。よう。」

「本當に仕様がなない兒だねえ。」

と、口小言を言ひ、母もしぶく起きて、雪洞を點けて立ちあがつたから、私も其の後にいつて、玄關と云つてもつい次の間だが、玄關へ出た。

母が靴脱へおりて、格子戸の掛金を外し、がらりと雨戸を繰ると、颯と夜風が吹きこんで、雪洞の火がちら／＼と靡く。其の時小さな鞠のやうなものが、つと軒下を跳び退いたやうだつたが、やがて雪洞の火先が立直つて、一道の光がさつと戸外の闇を破り、雨水の處々に溜つた地面を、一筋細長く照らし出した處を見ると、つい其處に、生後まだ一箇月も経たぬ、むく／＼と太つた、赤ちやけた子犬が、小指ほどの尻尾をちぎれさうに掉立てて、此方を見上げてゐる。

雪洞
ボンボリ。おほ
ひをかけ、柄の
ついた手燭。



掉
ふる。

なり

青貝
青色に光る美し
い貝。螺鈿をい
ふ。

なりは私が寝て居て想像したよりも大きかつたが、果して全身雨に濡れしよぼたれて、泥だらけになり、だらりと垂れた、割合に大きい耳から雫を滴らせ、ばつちりと二つの眼を青貝のやうに並べて光らせてゐる。

「おやく、まあ可愛らしい。」

と、母もつい言つてしまつた。況んや私は大好きだ。ぢつとして見ては居られない。母の袖の下から首を出して、ちよつくと呼んで見た。

すると、さほど怖れた様子もなく、ちよくと側へ来て、流石に少し平べつたくなりながら、頭を撫でてやる私の手を、下からぐいぐい推上げるやうにして、べろくと舐め廻し、手をくれるつもりなのか、頻りに圓い足を舉げて、はたくやつてゐたが、果はやはり

咬む
カむ。

居附く

嗅ぐ
カぐ。

談判

りと痛まぬほどに小指を咬む。私は可愛くて可愛くてたまらない。母の顔を見上げながら、少し鼻聲を出して、

「お母さん、何か遣つて。」

「遣るのも好いけれども、居附いてしまふと、仕方がないからねえ。」と、口では拒むやうな事を言ひながら、それでも臺所へ行つて、缺けた茶碗に冷飯を盛つて、何かの汁を掛けて来てくれた。

早速靴脱へ引入れて是を當てがふと、子犬は一寸香を嗅いで、すぐうまさうに、まづびちやくと舐めだしたが、汁が鼻の孔へ入ると見えて、時々くしんくと小さな嚏をする。忽ち汁を舐めつくして、今度は飯にかゝつた。

此の際に私は母と談判を始めて、
「今晚一晩泊めて遣つて。」

棧俵法師

サンダラボウ
シ。米俵の上下
にふたとして用
ひる藁にて作れ
る圓く平たきも
の。

二葉亭四迷

長谷川辰之助。
小説家。東京外
國語學校出身。
東京の人。明治
四十二年歿。年
四十八。

と、雪洞を持つた手にぶらさがる。母は一寸濫つたが、もうかうな
つては爲方がない。

「お父さんに叱られるけれど。」

と言ひながら、棧俵法師を捜して来て、靴脱の隅に敷いて遣つた。
それは好かつたが、其の晩一晩啼きとほされて、私はちつとも知ら
なかつたが、お蔭で母は父に小言を言はれたさうな。

犬嫌ひの父は、泊めたその夜を啼き明かされると、うんざりして
しまつて、翌日は是非逐出すと言出したから、私は子犬を抱いて逃
廻つて、どうしても放さなかつた。父は困つた顔をしてゐたが、し
かしそれも一時の事で、そのうちに子犬も獨寝に慣れて、夜も啼か
なくなる、逐出す筈のものに何時しかポチといふ名まで附いて、
姿が見えぬと、父までが一緒に捜すやうになつてしまつた。

(二葉亭四迷—平凡)

二 新緑の奈良

奈良はいつ來ても好いが、殊に新緑の頃が好い。櫻の頃に來た
時には、まだ黄いろく枯れたまゝであつた芝は、生き／＼と青んで、
鹿がその上に寝ころんだり、又その青い芽をたべたりしてゐた。

猿澤の池の柳は、萌黄色をした其の若々しい美しさが、稍老いて、
こんもりと葉を茂らしつゝ、水に映つてゐた。春によく來る、團體
の客のざわめきも、今はなくて、池の縁にあるベンチには、木蔭を求
めて子供を遊ばせてゐる女があるばかりだつた。

荒池のほとりはなほ靜かだつた。奈良ホテルに沿うて、葉櫻の
暗いほどの小徑を歩くのも好かつた。池には遠くの興福寺の塔
の影が映つてゐた。其の水に石を投げて水の輪が出来るのに興

萌黄色

青と黄との間の
色。

ざわめき

興福寺

法相宗の大本
山、藤原氏の氏
寺として盛大を
極めたりき。

じる子供たちもゐた。一つの輪が廣がつてそれが消えてゆくのを待つては、他の子供が石を投げるのであつた。

梅の木が林をなしてゐる處では、園丁が其の枝をおろしてゐた。

芝の上に落ちた青葉には、鹿が寄つて来て香を嗅いでゐた。

鷺の池のほとりには、躑躅が燃えるやうに咲いてゐた。ボートを浮べて漕ぎ廻つてゐる人達があつ

て、水の光も夏らしかつた。浮見堂に足を休めてゐると、水を渡る風が快く訪れる。



春日神社廻廊

燃える

高圓山

タカマドヤマ。奈良市の東南方にあり。

あせび 馬酔木。石南科に属する常緑灌木。



春日の社

春日神社。官幣大社。武甕槌命・經津主命・天兒屋根命・比賣命を奉祀す。

せびる

嫩草山・高圓山が、それ／＼にこんもりとして輝いてゐた。高畑のからりとした芝生の上には、大きな花が咲いたやうに、美しいバラソルが動いてゐた。あせびの花は大抵すがれてゐたが、其の花の多い谷のやうになつた路には、美しい影が出来て、こまかく洩れてひそんでゐる光の戯れも面白かつた。

春日の社に近い杉の木立は、夏らしく黒み渡つて、その葉の先から愛らしい浅緑の爪のやうな若葉が出てゐた。參詣の人の多く通る道には、鹿が澤山待受けてゐた。私は煎餅を手に持つてゐるだけ、皆與へてしまつたが、彼等は圓々とした可愛い眼を、私に向けて、いつまでもせびるやうに蹠いて來た。一つの鹿は、私の前で首を上げたり下げたりした。それは御時儀なのだつた。私は、おとなしく私の前に脚を折つてゐる鹿の背を、犬にでもするやうに撫

鹿子斑
カノコマダラ。

でてやつた。文字通り、鹿子斑の其の肌はつやくしかなかった。五月は毛並の光澤の一番美しい時だといふ事である。ぬけ換つてまだ間もない角は、やつとY字形になつたばかりで、赤みを帯びて、柔かさうだった。手に握つてみると、其の赤い色の血のぬくみが感じられた。

南大門
東大寺の總門。

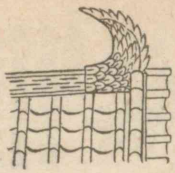
南大門の通りには、燕が澤山飛んでゐた。そこらに佇んでゐる鹿の細く高い脚の間を、すり抜けるかと思ふやうに飛んだり、角細工などの土産物を並べてゐる店の軒に、ついと飛入つたりしてゐた。



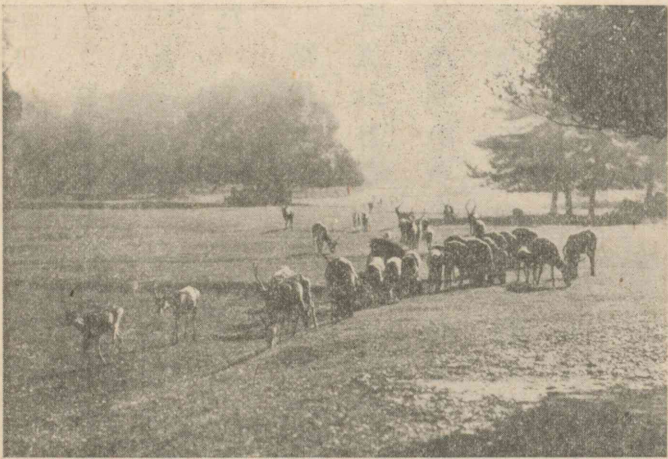
池の澤猿

大佛殿
東大寺の金堂。
東大寺は華嚴宗の大本山。
戒壇院
東大寺に屬す。僧に戒を授けるために設けた壇のある堂。

鴟尾



轉害門
天平年間（聖武天皇の御代）の建築といふ。



春日野

大佛殿を左へ、松林の間を行く路の感じも好かつた。草が長く伸びるまゝになつてゐる向うに、實に古い堂が見える。それは戒壇院らしかつた。顧みると、大佛殿の屋上の鴟尾が、金光燦爛として松の間に高く聳えて、松の梢には蟬がじい〜と鳴きはじめてゐた。

轉害門は、奈良に残つてゐる建築のうちでも、最も古いものの一つであるが、その簡素にして雄大な結構は、すばらしいものだと思つた。私は其の門をはひつて、大

きんぼうげ
金鳳花。うまの
あしがたの一
名。毛茛科に属
する多年生草
本。



木の芽
山椒の若葉をい
ふ。
春日山
嫩草山の南方に
竝ぶ。

佛殿の裏を歩いた。竹がわつさりと路に垂れてゐたり、柿の若葉が日を照りかへしてゐたりした。古い寺院の土塀が崩れた事によつて、却つて繪畫的に見えるやうな、淋しいひつそりとした道だつた。築地の裾にはきんぼうげが咲き、白い小さい蝶が休んでゐた。

嫩草山の前の茶亭で晝飯をたべた。木の芽の吸物を出した。嫩草山と春日山との間にある谿の道は、若葉の緑が顔にうつるやうな、朗かな感じの處だつた。爪先上りに苦しくないほどの登りになつて、山の奥に踏込んでゆく。洞の楓といふ名のついてゐる通りに、楓がトンネルのやうになつてをり、高い木には藤があちらにもこちらにも咲き垂れてゐた。奈良は藤の花の多い處だが、公園の茶亭のそれなどは、大方すがれてしまつてゐるのに、こゝだけ

かまきり
螳螂。直翅類に
属する昆蟲

荻原井泉水
名は藤吉、俳人。
東京帝國大學出
身、東京市の人。
明治十七年生。

はまだふさ／＼とした紫を垂れて美しかつた。歩けばさすがに暑さをおぼえる。道に沿うて綺麗な流があり、流に臨んで古風な亭がある。そこに私は腰をおろした。青いかまきりの子が、若い芒の葉先にとまつてふら／＼としてゐた。奈良の若葉はいゝなと私は今更のやうに思つた。

私は緑の深い中を縫ひながら、あてもなく歩いた。

(荻原井泉水—観音巡禮)

三 最後の授業

あの朝は、随分遅く学校に出掛けたので、先生からお小言を頂戴するのが大變怖かつた。学校を怠けて、野原へ遊びに駈出してしまはうかといふ氣が、ちらつと頭をかすめた。時候は暖かだつたし、空氣は澄み切つてゐた。森の外れには、鶉の啼聲が聞え、製材場の後の牧場には、プロシヤ兵が練兵をしてゐた。何かから何まで、教室よりも、ずつと強く私を惹きつけたのであつたが、私はそんな誘惑を拂ひのけて、学校の方へ駈けて行つた。

役場の揭示板の前に、幾人か人が立つてゐたので、何の告示だらうかと不審に思つたが、そのまゝ其處の廣場を通り抜けようとすると、鍛冶屋が私に聲をかけて、



鶉
ツグミ。燕雀類
に屬す。

誘惑
イウワク。
鍛冶屋

「よう、そんなに早く走つて行かなくつてもいゝよ。学校には十分間に合ふよ。」

と云つた。私は、鍛冶屋がからかつてゐると思つたので、どんな意味か、別に考へようともしなかつた。校庭に著いた時には、息が切れて、頭ががん／＼鳴つてゐた。

何時も、授業の始りは非常に騒々しくて、机の蓋をばた／＼閉ぢる音、書物を手荒く取扱ふ音、だらしなく歩む重い靴の音、先生が定規を軽く叩かれる音、それから「もつと靜かに、靜かに」といはれる先生の聲などが、街にゐても聞える程であつた。

私はこの混雜に紛れ込んで、誰にも氣附かれず自分の席に著かうと、當にしてゐたのだつたが、今日はまるで日曜日のやうに、何も彼もひつそりしてゐた。私は、教室の戸を開けて中に入るより外

閉ぢる

定規
チャウギ。

赧らむ
アカらむ。

に爲方が無かつた。私がどんなに頬を赧らめ、どんなにびく／＼してゐたかは、あなたがたは想像することが出来るでせう。ところが、案外にも、何事も起らなかつた。先生は怒りもしないで、私を見ても、の優しく、

「フランクさん、早く席にお著きなさい。君に構はず、授業を始めるところです。」

と言はれた。私はすぐ自分の机に著いて、腰掛けた。さて先づ氣附いたことは、先生が綺麗な長い緑色の上著を著て、何時もは訪問日に用ひられる黒い絹の帽子を被つて居られることであつた。そして級全體が妙に靜肅に見えた。併し一番私を驚かしたのは、何か事件の持上つた時以外には、決して來た事の無い村人達が、教室の後に居ることであつた。その人達は皆黙々として腰掛けて

綺麗

靜肅

黙々

アルサス・ローレン
共にフランス東部の一地方。當時プロシヤに屬し、大戦後フランスの有に歸す。常に獨。佛二國間にて所屬上問題となりし地方。

ゐた。そして誰も彼も悲しさうに見えた。

ハウザア老人は、持つてきたぐちや／＼の初級用の讀本を、自分の膝の上に擴げてゐた。私には一體何のことだかまるで解らなかつた。

それから、先生は立上つて、同じ調子で妙にも、の優しく、

「皆さん、これが私の最後の授業です。今後、アルサスとローレンとの學校では、ドイツ語だけで授業をせよといふ命令が、ベルリンから來ました。明日新任の先生がみえます。是がフランス語で教へる最後の授業です。皆さん、よく氣を付けてゐて下さい。」

フランス語での最後の授業！ 私はフランス語の書き方がやうやく解つた。それといふのは、私はこれまで決して勉強した事がなかつたのだ。私が書物を見た時、今まで非常にむづかしく、退

屈なものに思はれたその書物が、別れに堪へられぬ私の舊友のやうに思はれた。今になつて、何もかも皆解つた。掲示板の告示はこれであつたのだ。村の老人達の臨席も、此の最後の授業のためであつたのだ。是が四十年間精勤して下さつた先生に對する感謝と、彼等の愛する郷土に對する敬意とを示さうとする方法であつた。

不圖
フト。

不圖、私は名を呼ばれた。暗誦の順番が廻つて來たのだつた。私は文法の規則を、最初から終りまで、例外も何もかもちつとも間違ひなく言ふことが出來たら、どんなに嬉しかつたであらう。併し、私は、先づ最初の語句からやり損つて、頸を垂れたまゝ上げもしないで、恥ぢらつて立つてゐた。すると次のやうな先生のお言葉が耳に入つた。

恥ぢらふ

「フランクさん、私は君を叱らうとは思つてゐません。君は今日までに十分罰を受けてゐます。過失は君ひとりに限つたことではない、皆がさうでした。『なあと時間はたつぶりある。勉強は明日にしよう。』と誰しも考へてゐました。ところでそれはどんな結果になりましたか。そこらに居るプロシヤ人から、おい、君はフランス人だといふ様子をしてゐるが、自分の國語を話すことも書くことも出來ないではないか。』と言はれても、返す言葉はないでせう。」それから、先生はフランス語の話をされた。フランス語は、世界で一番美しい言葉であり、一番はつきりしてゐて、一番力強い言葉であるといふことや、我々は此の言葉を大切に、決して忘れないやうにすべきことなどを話された。その譯は、どんな國民でも、その國の國語を守つてゐる間は、征服されることは斷じてない、國

語は牢獄を開く鍵であるから、といふのであつた。

それから先生は、文法書を取上げて、読んで下さつた。私はそれがやさしいのに驚いてしまつた。先生の言はれることは、總て非常に明瞭簡単に思はれた。それもその筈で、私は今までこれほど注意深く聴いたことはなかつた。しかし、先生もこれほど熱心に説明して下さいたこともなかつたと思ふ。氣の毒にも、先生は、知つてゐられるだけのことを、此の授業時間中にすつかり話してしまひたいと思つて居られるやうであつた。

それから今度は習字だ。新しいお手本が綺麗な紙片に次のやうに書かれてあつた、

フランス
France, アルサス
 Alsace.
フランス、
France, アルサス
 Alsace.

明瞭
メイレウ。あき
らか。

しまひたい

檐下
ノキシダ。

是等の文字は、恰も机上から波打つて来る小さい國旗のやうに見えた。私達は一所懸命にそれを習つた。紙の上にきしむべんの音を聞きとることが出来た。檐下に靜かに鳴いてゐる鳩の聲を耳にした時に、

「鳩もドイツ語で歌ふのかしら？」

と私は獨言を言つた。

時々、私がそつと見ると、先生はぢつと椅子に腰掛けて、自分の小さい教室の光景を心に刻みつけて行かうとするやうに、あたりの一事一物を眺め廻して居られた。四十年間、先生はこの同じ場所に、自分の級の生徒を前に控へて腰掛けて居られたのであつた。そして、明日は永遠に此の場所を立去られるのであつた。

それでも、先生は健氣にも最後まで皆の暗誦を聞かれた。習字

震へて

が終ると歴史で、その次には小さい子供達が初步の學課をお經を讀むやうに唱へた。——ba, be, bi, bo, bu. 鍛冶屋の爺さんは、眼鏡を掛けて、子供等と一緒に練習をした。爺さんの聲は、かなり震へてゐた。その聲が妙に聞えるので、私達はよく笑つたが、併し又泣かずには居られなかつた。

時計が鳴つた。正午だ。其の瞬間、練兵から歸るプロシヤ兵の歩調が聞えた。先生は、つと立上られた。顔は蒼ざめ、背が此の時ほど高く見えたことはなかつた。

「皆さん、皆さん——」と先生は言はれたが、何かしら先生の息をつまらせるものがあつた。先生はその先を續いて話されることが出来なかつた。話すよりも考へられたのか、先生はくるりと黑板の方を向いて、チョークを取上げて大きいきつぱりとした字で、

チョーク
白墨。

Vive la France!

(フランス萬歳!)

と書かれた。

それから先生は、壁に向つて顔を隠し、私達に出て行つてもいと云ふ手真似をなされただけで、少しも口を利かれなかつた。

(アルフォンズドーデー)

アルフォンズドーデー
フランスの小説家。劇作家。(一八四〇—一八九七)

主要文字形象表

						
日	心	女	子	弓	川	山

						
爪	犬	牛	手	水	木	月

						
石	矢	目	皿	瓦	瓜	戶

						
虫	白	耳	糸	竹	包	甲

						
貝	角	豕	州	交	衣	舟

						
高	馬	首	飛	門	車	身

						
龜	鼠	豕	巢	鹿	鳥	魚

主要象形文字表

一

ゆす(柚子) いしす(礎) こず(梢) かず(敷) きず(傷・疵・瑕) くず(葛) すず(鈴) すず(錫)	すすき(鱸) すずし(生絹) すずしろ(蘿蔔) すずな(菘) すずめ(雀) すずり(硯) ねずみ(鼠) はす(筭)	ゆはず(昇) はずみ(機) みみず(蚯蚓) もず(百舌鳥・鴟) ずす(誦) たたずむ(佇) なずらふ(準) ひずむ(歪)
まず(雜・交・混) ずるし(狡猾) すずし(涼し) かならず(必) すずろ(漫)	さ行變格活用ノ濁レルモノ。例へバ、 禁ず・信ず 論ず	

ふ あふひ(葵) あふぐ(仰) あふぐ(煽) あふぎ(扇)	左記ノ外ハ皆ほナリ。 あを(青) あがひ(青貝・螺鈿) いさを(功・績) うを(魚) かつを(鱈) ひを(氷魚) さを(竿・棹) たをやか(嬋妍) たをやめ(手弱女) とを(十) ぼせを(芭蕉) みさを(操) みを(滯・水脈) みを(濡・水脈) わさを(俳優) かを(香・薰) しを(菱) まを(申) しを(可憐) やを(徐)	ふノ假名ヲをト發音スル場合
わ あわ(泡・沫) いわし(鯛) うらわ(浦回) くつわ(轡・口輪) くるわ(郭) くるわ(慈姑) ことわざ(諺) ことわり(道理) こわいろ(聲色) こわね(聲音) こわだか(聲高)	語中・語尾ニテハわ・は紛レ易シ。 左記ノ外ハヲ用フ。	あふる(煽) あふち(棟・樗) あふみ(近江) とほたふみ(遠江) きのふ(昨日) けふ(今日) さふらふ(候) たふる(仆・倒) たふとし(貴) はふる(投) ふくろふ(鼻) かげろふ(陽炎)
ぢ ぢ(父) をぢ(伯父・叔父・小父) おぢ(爺・祖父) ぢ(路) こうぢ(小路) みそぢ(三十)	さわやか(爽) しわ(皺) しわむ(皺) たわやか(嬋妍) たわやめ(手弱女) たわら(俵) のわき(野分) はらわた(腸) ひわ(鵪) あわつ(周章) あわただし(倉皇) うわる(植) かわく(乾・渴) ことわる(斷・理) さわぐ(騷) すわる(坐) たわむ(撓む) しわし(吝) よわし(弱)	少數ノぢヲ語記スベシ。左記ノ外ハヒヲ用フ。
ず ずみ(數珠) ずみ(桷) ずはえ(條) あんず(杏子)	よそぢ(四十) あぢ(味) あぢ(鱒) あぢさる(紫陽花) うぢ(氏) かぢ(棍) かぢ(鍛冶) ひぢ(泥) ふぢ(藤) くぢら(鯨) こうぢ(麴) ことぢ(琴柱) すぢ(臂) ひぢ(鬚) なんぢ(汝) ねぢ(螺旋) ねぢ(物) もぢ(紅葉) わらぢ(草鞋) なめくぢ(蛞蝓) ちぢむ(縮)	少數ノずヲ語記スベシ。左記ノ外ハづヲ用フ。

昭和十二年六月十五日初版印刷
 昭和十二年六月二十日訂正再版印刷
 昭和十三年一月廿六日訂正再版印刷
 昭和十六年十月三十日訂正三版發行



編纂者

佐木信綱
 武田祐吉

發行者

東京市麴町區飯田町二丁目二十番地
 中等學校教科書株式會社

印刷者

代表者 山本慶治
 大阪市西區阿波座中通二丁目四番地
 井下書籍印刷所
 代表者 井下精一郎
 (西大三五)

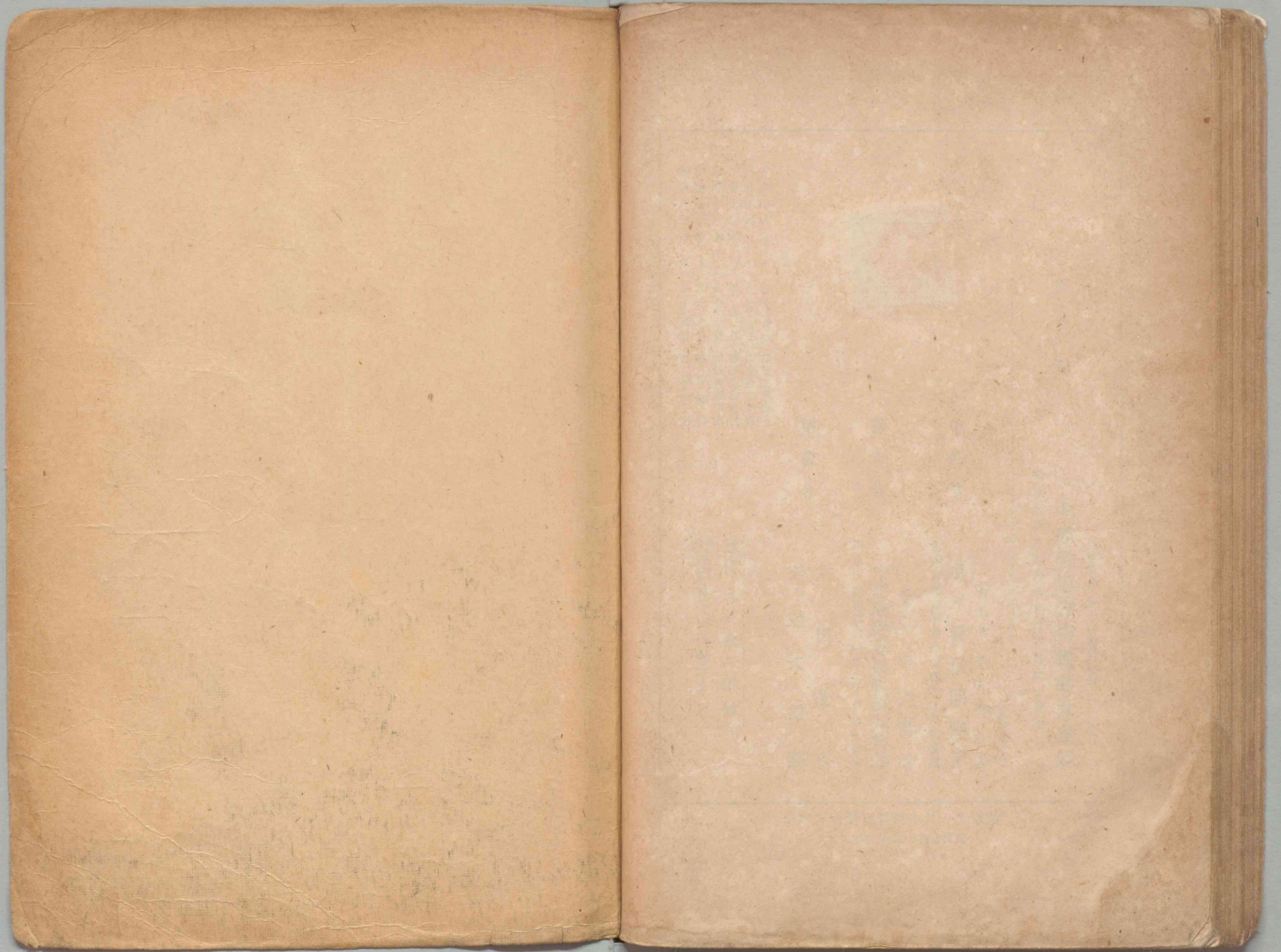
發行所

東京市麴町區飯田町二丁目二十番地
 中等學校教科書株式會社
 日本出版文化協會會員番號 一一七五二二

新撰女子國語讀本全八卷
 定價 各卷金六拾錢

(略名) 湯川 佐佐木女國

配給元 日本出版配給株式會社
 東京市神田區淡路町二ノ九





一
B
赤波根
子